

与謝野晶子 訳

源氏物語

若菜(下)巻



一冊堂青空文庫

源氏物語

若菜（下）

紫式部

與謝野晶子訳

二ごころたれ先^まづもちてさびしくも悲
しき世をば作り初^そめけん （晶子）

小侍従が書いて来たことは道理に違いないがまた露骨なひどい言葉だとも衛門督^{えもんのかみ}には思われた。しかももう浅薄な女房などの口先だけの言葉で心が慰められるものとは思われないのである。こんな人を中へ置かずに一言でも直接恋しい方と問答のできることは望めないであろうかと苦しんでいた。限らない尊敬の念を持っている六条院に穢辱^{おじよく}を加えるに等しい欲望をこうして衛門督が抱^{いだ}くようになった。

三月^{やよい}の終わる日には高官も若い殿上役人たちも皆六条院へ参った。氣不精になつてゐる衛門督はこのことを皆といっしよにするのもおつくうなのであったが、恋しい方のお

いになる所の花でも見れば気の慰みになるかもしれないぬと思つて出て行つた。賭弓かけゆみの競技が御所で二月にありそうでなかつた上に、三月は帝みかどの母后ぎよきづきの御忌月ぎよきづきでためであるのを残念がつている人たちは、六条院で弓の遊びが催されることを聞き伝えて例のように集まつて来た。左右の大將は院の御養女の婿であり、御子息であつたから列席するのがむろんで、そのために左右の近衛府このえふの中將に競技の参加者が多くなり、小弓という定めであつたが、大弓の巧者な人も来ていたために、呼び出されてそれらの手合わせもあつた。殿上役人でも弓の芸のできる者は皆左右に分かれて勝ちを争いながら夕べに至つた。春が終わる日の霞かすみの下にあわただしく吹く夕風に桜の散りかう庭がだれの心をも引き立てて、大將たちをはじめ、すでに酔つている高官たちが、

「奥のかたがたからお出しになつた懸賞品が皆平凡な品でないのを、技術の専門家にだけ取らせてしまうのはよろしくない。少し純真な下手者へたものも競争にはいりましょう」

などと言つて庭へ下りた。おこの時にも衛門督えもんのかみがめいつたふうでじつとしているのがその原因を正確ではないにしても想像のできる大將の目について、困つたことである。不祥事が起こってくるのではないかと不安を感じだし、自分までも一つの物思ひのできた気がした。この二人は非常に仲がよいのである。大將のために衛門督が妻の兄であると

いうばかりでなく、古くからの友情が互いにあつて睦まじい青年たちであるから、一方がなんらかの煩悶はんもんにとらえられているのを、今一人が見てはかわいそうで堪えられがたくなるのである。衛門督自身も院のお顔を見ては恐怖に似たものを感じて、恥ずかしくなり、誤った考えにとらわれていることはわが心ながら許すべきことでない、少しのことも人を不快にさせ、人から批難を受けることはすまいと決心している自分ではないか、ましてこれほどおそれおおいことはないかと心を鞭むちうっている人が、また慰められたくなつて、せめてあの時に見た猫でも自分は得たい、人間の心の悩みが告げられる相手ではないが、寂しい自分はせめてその猫を馴なつけてそばに置きたいとこんな気持ちになつた衛門督は、氣違いじみた熱を持つて、どうかしてその猫を盗み出したいと思うのであるが、それすらも困難なことではあつた。

衛門督は妹の女御にょぎの所へ行つて話すことで悩ましい心を紛らせようと試みた。貴女きじよらしい慎しみ深さを多く備えた女御は、話し合っている時にも、兄の衛門督に顔を見せるようなことはなかつた。同胞きょうだいですらわれわれはこうして慣らされているのであるが、思いがけないお顔を外にいる者へ宮のお見せになつたことは不思議なことであると、衛門督えもんのかみもさすがに第三者になつて考えれば肯定できないことは思われるのであるが、熱愛

を持つ人に対してはそれを欠点とは見なされないのである。衛門督は東宮へ伺候して、むろん御兄弟でいらせられるのであるから似ておいでになるに違いないと思つて、お顔を熱心にお見上げするのであったが、東宮ははなやかな愛嬌あいきょうなどはお持ちにならぬが、高貴の方だけにある上品に艶えんなお顔をしておいでになった。帝のお飼になる猫の幾疋ひきかの同胞きょうだいがあちらこちらに分かれて行っている一つが東宮の御猫にもなっていて、かわいい姿で歩いているのを見ても、衛門督には恋しい方の猫が思い出されて、

「六条院の姫宮の御殿におりますのはよい猫でございます。珍しい顔でして感じがよろしいのでございます。私はちよつと拝見することができました」

こんなことを申し上げた。東宮は猫が非常にお好きであらせられるために、くわしくお尋ねになった。

「支那しなの猫でございます、こちらの産のものとは変わっておりました。皆同じように思えば同じようなものでございますが、性質の優しい人馴なれた猫と申すものはよろしいものでございます」

こんなふうには宮がお心をお動かしになるようにばかり衛門督は申すのであった。

あとで東宮は淑景舎しゅけいしゃの方の手から所望をおさせになったために、女三にょさんの宮みやから唐猫からねこが

献上された。噂うわさされたとおりに美しい猫であると言って、東宮の御殿の人々はかわいがっているのであったが、衛門督は東宮は確かに興味をお持ちになってお取り寄せになりそうであると観察していたことであつたから、猫のことを知りたく思つて幾日かのうちにまた参つた。まだ子供であつた時から朱雀院すざくが特別にお愛しになつてお手もとでお使いになつた衛門督であつて、院が山の寺へおはいりになつてからは東宮へもよく伺つて敬意を表していた。琴など御教授をしながら、衛門督は、

「お猫がまたたくさんまいりましたね。どれでしょう、私の知人は」

と言いながらその猫を見つけた。非常に愛らしく思われて衛門督は手でなでていた。

宮は、

「實際容貌さうぼうのよい猫だね。けれど私には馴なつかないよ。人見知りをする猫なのだね。しかし、これまで私の飼っている猫だつてたいしてこれには劣っていないよ」

とこの猫のことを仰せられた。

「猫は人を好ききらいなどあまりせぬものでございますが、しかし賢い猫にはそんな知恵があるかもしれません」

などと衛門督は申して、また、

「これ以上のがおそばに幾つもいるのでございましたら、これはしばらく私にお預からせください」

こんなお願いをした。心の中では愚かしい行為をするものであるという気もしているのである。

結局衛門督は望みどおりに女三の宮の猫を得ることができて、夜などもそばへ寝させた。夜が明けると猫を愛撫するのに時を費やす衛門督であった。人馴つきの悪い猫も衛門督にはよく馴れて、どうかすると着物の裾へまつわりに来たり、身体をこの人に寄せて眠りに来たりするようになって、衛門督はこの猫を心からかわいがるようになった。物思いをしながら顔をながめ入っている横で、に・よ・う・に・よ・うとかわいい声で鳴くのを撫でながら、愛におごる小さき者よと衛門督はほほえまれた。

「恋ひわぶる人の形見と手なれば汝よ何とて鳴く音なるらん

これも前生の約束なんだろうか」

顔を見ながらこう言うと、いよいよ猫は愛らしく鳴くのを懷中に入れて衛門督は物思

いをしていた。女房などは、

「おかしいことですね。にわかには猫を御寵愛ちようあいされるではありませんか。ああしたものには無関心だった方がね」

と不審がつてささやくのであった。東宮からお取りもどしの仰せがあつて、衛門督はお返しをしないのである。お預かりのものを取り込んで自身の友にしていた。

左大将夫人の玉鬘たまかすらの尚侍ないしのかみは真実の兄弟に対するよりも右大将に多く兄弟の愛を持っていた。才気のあるはなやかな性質の人で、源大将の訪問を受ける時にも睦むつまじいふうに取り扱つて、昔のとおりに親しく語ってくれるため、大将も淑景舎しゅけいしゃの方が羞恥しゅううちを少なくして打ち解けようとする気持ちのないようなのに比べて、風変わりな兄弟愛の満足がこの人から得られるのであった。左大将は月日に添えて玉鬘を重んじていった。もう前夫人は断然離別してしまつて尚侍が唯一の夫人であつた。この夫人から生まれたのは男の子ばかりであるため、左大将はそれだけを物足らず思い、真木柱まぎばしらの姫君を引き取つて手もとへ置きたがつているのであるが、祖父の式部卿しきぶきやうの宮が御同意をあそばさない。

「せめてこの姫君にだけは人から譏そしられない結婚を自分がさせてやりたい」

と言つておいでになる。帝みかどは御伯父おじのこの宮に深い御愛情をお持ちになつて、宮から

奏上そうじやうされることにお背そむきになることはおできにならないふうであつた。もとからはなやかな御生活をしておいでになつて、六条院、太政大臣家に続つづいての権勢の見える所で、世間の信望も得ておいでになつた。左大将も第一人者たる将来が約束されている人であつたから、式部卿の宮の御孫女むすめ、左大将の長女である姫君を人は重く見ているのである。求婚者がいろいろな手を通じて来てすでに多数に及んでいるが、宮はまだそれを婿にと選定されるふうもなかつた。かれにその氣があればと宮が心でお願いになる衛門督は猫ほどにも心を惹ひかぬのかまつたくの知らず顔であつた。左大将の前夫人は今も病的な、陰氣な暮らしを續けて、若い貴女のために朗らかな雰囲ふんいき気を作ろうとする努力もしてくれないために、姫君は寂しがつて、人づてに聞きく繼母まははの生活ぶりにあこがれを持つていた。こうした明るい娘なのである。

兵部卿ひやうぶきやうの宮は今も御独身で、熱心にお望みになつた相手は皆ほかへ取られておしまいになる結果になつて、世間体も恥はずかしくお思おもいになるのであつたが、この姫君に興味をお感じになり、縁談をお申し入れになると、式部卿の宮は、

「私はそう信じているのだ。大事に思おもう娘は宮仕えに出すことを第一として、続いては宮たちと結婚させることがいいとね。普通の官吏と結婚させるのを頼たのもしいことのように

に思つて親たちが娘の幸福のためにそれを願うのは卑しい態度だ」

とお言いになつて、あまり求婚期間の悩みもおさせにならずに御同意になつた。兵部卿の宮はこの無造作な決まり方を物足らぬようにもお思いになつたが、輕蔑けいべつしがたい相手であつたから、ずるずる延ばしで話の解消をお待ちになることもおできにならないで、通つて行くようになつた。式部卿の宮はこの婿の宮を大事にあそばすのであつた。宮は幾人もの女王にょおうをお持ちになつて、その宮仕え、結婚の結果によつて苦勞をされることの多かつたのに懲りておいでになるはずであるが、最愛の御孫女のためにまたこうした婿かしずきをお始めになつたのである。

「母親は時がたつにしたがつて病的な女になるし、父親はそちらの意志には従わない子だと言つてそまつに見ている姫君だからかわいそうでならぬ」

などとお言いになつて、新夫婦の居間の裝飾まで御自身で手を下してなされたり、またお指図さしずをされたりもするのであつた。兵部卿の宮はお亡なくしになつた先夫人をばかり恋しがつておいでになつて、その人に似た新婦を得たいと願つておいでになつたために、この姫君を、悪くはないが似た所がないと御覧になつたせいか、通つておいでになるのおつくうなふうをお見せになつた。式部卿の宮は失望あそばした。病人である母

君も気分の常態になっている時にはこの娘の思うようでない結婚を歎いて、いよいよ人生をいやなものにきめてしまった。父親の左大将もこの話を聞いて、自分のあやぶんだとおりの結果になったではないか、多情者の宮様であるからと思つて、初めから自分が賛成しなかつた婿であつたから困つたことであると歎いていた。玉鬘夫人は宮のお情けの薄さを継娘まよひすめの不幸として聞いていながら、自分がもし結婚をしてそうした目にあつていたなら、六条院の人々へも、実父の家族へも不名誉なことになるのであつたと思つた。そして左大将の妻になつた運命を悲しむ気もなくなり、継娘に限りなく同情した。その自分の処女時代にも兵部卿の宮を良人おっとにしようとは少しも思わなかつた。ただあれだけの情熱を運んでくださった方が、左大将と平凡な夫婦になつてしまつたことを輕蔑けいべつしておいでにならないかとそれ以来恥ずかしく思つていたのであると玉鬘夫人は思い、その宮が継娘の婿におなりになつて、自分のことをどう聞いておいでになるであらうと思つと晴れがましいような氣もするのであつた。この夫人からも新婚した姫君の衣裳いしやうその他の世話をした。前夫人がどう恨んでいるかというようなことは知らぬふうにして、長男、次男を中にして好意を寄せる尚侍ないしのかみに前夫人は友情をすら覚えていたのであるが、式部卿の宮家には大夫人という性質の曲がつた人が一人いて、この人は常にだれのこと

も憎んで、罵言をやめないのである。

「親王がたというものは一人だけの奥さんを大事になさるということで、派手な生活の
できない補いにもなろうというもののだのに」

と陰口かげぐちをするのが兵部卿の宮のお耳にはいった時、不愉快なことを聞く、自分に最愛の妻があつた時代にも他との恋愛の遊戯はやめなかつた自分も、こうまではひどい恨み言葉は聞かないでいたとお思ひになつて、いつそう亡き夫人を恋しく思召すことばかりがつつて、自邸で寂しく物思ひをしておいになる日が多かつた。そうはいうものの二年もその状態で続いて来た今では、ただそれだけの淡い関係の夫婦として済んで行つた。

歳月としつきが重なり、帝みかどが即位をあそばされてから十八年になつた。

「将来の天子になる子のないことで自分には人生が寂しい。せめて気楽な身の上になつて自分の愛する人たちと始終出逢うこともできるようにして、私人として楽しい生活がしてみたい」

以前からよくこう帝は仰せられたのであつたが、重く御病氣をあそばされた時にわかに譲位を行なわせられた。世人は盛りの御代みよをお捨てあそばされることを残念がつて

歎いたが、東宮ももう大人になっておいでになったから、お変わりになつても特別変わったこともなかった。ゆるぎない大御代と見えた。太政大臣は関白職の辞表を出して自邸を出なかった。

「人生の頼みがたさから賢明な帝王さえ御位をお去りになるのであるから、老境に達した自分が挂冠するのに惜しい気持ちなどは少しもない」

と言つていたに違いない。左大將が右大臣になつて関白の仕事もした。御母君の女御は新帝の御代を待たずに亡くなつていたから、後の位にお上されになつても、それはもう物の背面のことになつて寂しく見えた。六条の女御のお生みした今上第一の皇子が東宮におなりになつた。そうなるはずのことはだれも知つていたが、目前にそれが現われてみればまた一家の幸福さに驚きもされるのであつた。右大將が大納言を兼ねて順序のままに左大將に移り、この人も幸福に見えた。六条院は御讓位になつた冷泉院に御後嗣のないのを御心の中では遺憾に思召された。実は新東宮だつて六条院の御血統なのだが、冷泉院の御在位中には御煩悶もなく過ごされたほど、例の密通の秘密は隠しおおされたが、そのかわりにこの御系統が末まで続かぬように運命づけられておしまいになつたのを六条院は寂しくお思いになつたが、御口外あそばすことでもないのてただお

心で味けなくお感じになるだけであつた。東宮の御母女御は皇子たちが多くお生まれになつて帝の御寵はますます深くなるばかりであつた。またも王氏の人が后にお立ちになることになつてゐることで、今度で三代にもなつてゐたから何かと飽き足らぬらしい世論があるのをお知りになつた時、冷泉院の中宮は以前もこうした場合に六条院の強い御支持があつて、自分の後の位は定つたのであると過去を回想あそばしますます院の恩をお感じになつた。

冷泉院の帝は御期待あそばされたとおりに、御窮屈なお思いもなしに御幸などもおできになることになつて、あちらこちらと御遊幸あそばされて、今日の御境遇ほどお楽しいものはないようにお見受けされるのであつた。帝は六条院においでになる御妹の姫宮に深い関心をお持ちになつたし、世間がその方に払う尊敬も大きいのであるが、なお紫夫人以上の夫人として六条院の御寵を受けておいでになるのではなかつた。年月のたつにしたがつて女王と宮の御中にこまやかな友情が生じて、六条院の中は理想的な穏やかな空氣に満たされているが、紫夫人は、

「もう私はこうした出入りの多い住居から退きまして、静かな信仰生活がしたいと思ひます。人生とはこんなものということも経験してしまつたような年齢にもなつてゐるの

ですもの、もう尼になることを許してくださいませんか」

と、時々まじめに院へお話しするのであるが、

「もつてのほかですよ。そんな恨めしいことをあなたは思うのですか。それは私自身が実行したいことなのだが、あなたがあとに残って寂しく思ったり、私といっしょにいる時と違った世間の態度を悲しく感じたりすることになってはという気がかりがあるために現状のままでいるだけなのですよ。それでもいつか私の実行の日が来るでしょう、あなたはそのあとのことになさい」

などとばかり院はお言いになって、夫人の志を妨げておいでになった。女御は今も女王を真実の母として敬愛していて、明石夫人は隠れた女御の後見をするだけの人になって謙遜^{けんそん}さを失わないでいることは、かえって将来のために頼もしく思われた。尼君もうれし泣きの涙を流す日が多くて、目もふきただれて幸福な老婆の見本になっていた。

住吉^{すみよし}の神への願果たしを思い立って参詣^{さんけい}する女御は、以前に入道から送って来てあった箱をあけて、神へ約した条件を調べてみたが、それにはかなり大がかりなことを多く書き立ててあった。年々の春秋の神楽^{かぐら}とともに必ず長久隆運の祈りをするなどとは、今日の女御の境遇になつていなければ実行のできぬことであった。ただ走り書きにした

文章にも入道の学問と素養が見え、仏も神も聞き入れるであろうことが明らかに知られた。どうしてそんな世捨て人の心にこんな望みの楼閣が建てられたのであろうと、子孫への愛の深さが思われもし、神や仏に済まぬ氣もされた。並みの人ではなくてしばらく自分の祖父になってこの世へ姿を現わしただけの、功德を積んだ昔の聖僧ではなかったかなどと思われ、女御に明石あかしの入道を畏敬いけいする心が起こった。今度はまだ女御の行なうことにはせずに、六条院の参詣におつれになる形式で京を立つたのであった。

須磨すま明石時代に神へお約しになったことは次々に果たされたのであるが、その以後もまた長く幸運が続き、一門子孫の繁栄を御覧になることによっても神の冥助めいじょは忘れずに六条院は紫の女王にようおうも伴って御参詣あそばされるのであって、はなやかな一行である。簡素を旨として国の煩いになることはお避けになったのであるが、この御身分であつてはある所までは必ず備えられねばならぬ旅の形式があつて、自然に大きなことにもなつた。公卿こうけいも二人の大臣以外は全部供奉した。神前の舞い人は各衛府えふの次將たちの中ちゆうの容貌ぼうのよいのを、さらに背丈せたけをそろえてとられたのであつた。落選なげして歎く風流公子もあつた。奏樂者も石清水いwashimizuや賀茂かもの臨時祭に使われる専門家がより整えられたのであるが、ほかから二人加えられたのは近衛府このえふの中で音楽じやうずの上手として有名になつてゐる人

あつた。また神樂のほうを受け持つ人も多数に行った。宮中、院、東宮の殿上役人が皆御命令によつて供奉くぶの中にも無数にあつた。華奢かしやを尽くした高官たちの馬、鞍くら、馬添い侍、隨身、小侍の服装までもきらびやかな行列であつた。院の御車みくるまには紫夫人と女御をいっしょに乗せておいでになつて、次の車には明石夫人とその母の尼とが目だたぬふうに乗つていた。それには古い知り合いの女御の乳母めのとが陪乗したのである。女房たちの車は夫人付きの者のが五台、女御のが五台、明石夫人に属したのが三台で、それぞれに違つた派手はでな味のある飾りと服装が人目に立つた。明石の尼君がいっしょに来たのは、

「今度の参詣に尼君を優遇して同伴しよう。老人の心に満足ができるほどにして」

と院が言い出しになつたのであつて、はじめ明石夫人は、

「今度は院と女王様が主になつての御参詣なんですから、あなたなどが混じつておいでになつては私の立場も苦しくなりますからね、女御さんがもう一段御出世をなすつたあとで、その時に私たちだけでお参りをいたしましょう」

と言つて、尼君をとどめていたのであるが、老人はそれまで長命で生きておられる自信もなく心細がつてそつと一行に加わつて来たのである。運命の寵児ちやうじであることがしか

るべきことと思われる女王や女御よりも、明石の母と娘の前生の善果がこの日ほどあざやかに見えたこともなかった。

十月の二十日のことであつたから、中の忌垣に這う葛の葉も色づく時で、松原の下の雑木の紅葉が美しくて波の音だけ秋であるともいわれない浜のながめであつた。本格的な支那樂高麗樂よりも東遊びの音楽のほうがこんな時にはぴたりと、人の心にも波の音にも合っているようであつた。高い梢で鳴る松風の下で吹く笛の音もほかの場所で聞く音とは変わつて身にしみ、松風が琴に合わせる拍子は鼓を打つてするよりも柔らかでそして寂しくおもしろかつた。伶人の着けた小忌衣竹の模様と松の緑が混じり、挿頭の造花は秋の草花といつしよになつたように見えるが、「求の子」の曲が終わりに近づいた時に、若い高官たちが正装の袍の肩を脱いで舞の場へ加わつた。黒の上着の下から臍脂、紅紫の下襲の袖をにわかに出し、それからまた下の袴の赤い袂の見えるそれらの人の姿を通り雨が少しぬらした時には、松原であることも忘れて紅葉のいろいろが散りかかるように思われた。その派手な姿に白くほおけた萩の穂を挿してほんの舞の一節だけを見せてはいつたのがきわめておもしろかつた。

院は昔を追憶しておいでになった。途中で不幸な日のあつたことも目の前のことのよ

うに思われて、それについては語る人もお持ちにならぬ院は、関白を退いた太政大臣を恋しく思召おぼしめされた。車へお帰りになった院は第二の車へ、

たれかまた心を知りて住吉すみよしの神代を経たる松にこと問ふ

という歌を懷中紙ふところがみに書いたのを持たせておやりになった。尼君は心を打たれたように萎しおれてしまった。今日のはなやかな光景を見るにつけても、明石を源氏のお立ちになったころの歎なげかわしかったこと、女御が幼児であつたころにした悲しい思いが追想されて、運命に恵まれていることを知った。そしてまた山へはいった良人おとこも恋しく思われて涙のこぼれる気持ちをおさえて、

住すみの江を生けるかひある渚なみぞとは年ふるあまも今日や知るらん

と書いた。お返事がおそくなつては見苦しいと思い、感じたままの歌をもつてしたのである。

昔こそ先づ忘られね住吉の神のしるしを見るにつけても

とまた独言ひとりごちもしていた。一行は終夜を歌舞に明かしたのである。二十日はつかの月の明りではるかに白く海が見え渡り、霜が厚く置いて松原の昨日とは変わった色にも寒さが感じられて、快く身にしむ社前の朝ぼらけであった。自邸での遊びには馴なれていても、あまり外の見物に出ることを好まなかった紫の女王は京の外の旅もはじめての経験であったし、すべてのことが興味深く思われた。

住の江の松に夜深く置く霜は神の懸かけたる木綿ゆふかづらかも

紫夫人の作である。小野篁おののたかむらの「比良ひらの山さへ」と歌った雪の朝を思つて見ると、奉つた祭りを神が嘉納かのうされた証あかしの霜とも思われて頼もしいのであった。

女御にようじ、

神人かんびとの手に取り持たる榊葉さかきばに木綿ゆふかけ添ふる深き夜の霜

中務なかつかさの君、

祝子はふりこが木綿ゆふうち紛ふひ置く霜げは実げにいちじるき神かみのしるしか

そのほかの人々からも多くの歌は詠よまれたが、書いておく必要がないと思つて筆者は省いた。こんな場合の歌は文学者らしくしている男の人たちの作も、平生よりできの悪いのが普通で、松の千歳ちとせから解放されて心の琴線ことじに触れるようなものはないからである。

朝の光がさし上るころにいいよ霜は深くなつて、夜通し飲んだ酒のために神楽かぐらの面おもてのようになつた自身の顔も知らずに、もう篝火かがりびも消えかかっている社前で、まだ万歳さんざいと櫓うを振ふつて祝い合っている。この祝福は必ず院の御一族の上に形となつて現われるであろうとますますはなばなく未来が想像されるのであつた。非常におもしろくて千夜の時のあれと望まれた一夜がむぞうさに明けていったのを見て、若い人たちは渚なぎさの帰る波のようにここを去らねばならぬことを残念がつた。はるばると長い列になつて置かれた車の、垂たれ絹の風に開く中から見える女衣装は花の錦にしきを松原に張つたようであつた

が、男の人たちの位階によって変わった色の正装をして、美しい膳部を院の御車みくるまへ運び続けるのが布衣ほいたちには非常にうらやましく見られた。明石の尼君の分も浅香の折敷おしきに鈍色にびの紙を敷いて精進物で、院の御家族並みに運ばれるのを見ては、

「すばらしい運を持った女というものだね」

などと彼らは仲間で言い合った。おいでになった時は神前へささげられる、持ち運びの面倒な物を守る人数も多くて、途中の見物も十分におできにならなかったのであつたが、帰途は自由なおもしろい旅をされた。この楽しい旅行に山へはいりきりになった入道あずかを与あずからせることのできなかったことを院は物足らず思召されたが、それまでは無理なことであろう。実際老入道がこの一行に加わっているとしたら見苦しいことではなかつたであろうか。その人の思ひ上がった空想がことごとく実現されたのであるから、だれも心は高く持つべきであると教訓をされたようである。いろいろな話題になつて明石の人たちがうらやまれ、幸福な人のことを明石の尼君という言葉もはやつた。太政大臣家の近江おうみの君は双六すじろくの勝負さいの賽を振る前には、

「明石あかしの尼様、明石の尼様」

と呪文じゅもんを唱えた。

法皇は仏勤めに精進あそばされて、政治のことなどには何の干渉もあそばさない。春秋の行幸みゆきをお迎えになる時にだけ昔の御生活がお心の上に姿を現わすこともあるのであった。女三によさんの宮みやをな気がかりに思召おぼしめされて、六条院は形式上の保護者と見て、内部からの保護を帝にお託みかどしになった。それで女三の宮は二品にほんの位にお上げられになって、得させられる封戸ふこの数も多くなり、いよいよはなやかなお身の上になったわけである。紫夫人は一方の夫人の宮がこんなふうに年月に添えて勢力の増大していくのに対して、自分はただ院の御愛情だけを力にして今の所は負け目がないとしても、そのお志というものも遂には衰えるであろう、そうした寂しい時にあわない前に今のうちに善処したいとは常に思っていることであつたが、あまりに賢がるふうに思われてはという遠慮をして口へたびたびは出さないのである。院は法皇だけでなく帝までが関心をお持ちになるということがおそれおおく思召されて、冷淡にする噂うわさを立てさすまいというお心から、今ではあちらへおいでになることと、こちらにえられることがちょうど半々ほどになつていた。道理なこととは思ひながらもかねて思つたとおりの寂しい日の来始めたことに女王にょおうは悲しまれたが、表面は冷静に以前のとおりにしていた。東宮に次いでお生まれになつた女一の宮を紫夫人は手もとへお置きしてお育て申し上げていた。そのお世話

の楽しさに院のお留守るすの夜の寂しさも慰められているのであった。御孫の宮はどの方をも皆非常にかわいく夫人は思っているのである。花散里夫人はなちるさとは紫夫人も明石夫人も御孫宮がたのお世話に没頭しているのがうらやましくて、左大将の典侍ないしのすけに生ませた若君を懇望して手もとへ迎えたのを愛して育てていた。美しい子でりこうなこの孫君を院もおかわいがりになった。院は御子の数が少ないように見られた方であるが、こうして広く繁栄する御孫たちによつて満足をしておいになるようである。右大臣が院を尊敬して親しくお仕えることは昔以上で、玉鬘たまむすむももう中年の夫人になり、何かの時には六条院へ訪ねて来て紫夫人にも逢あつて話し合うほかにも親しみ深い往来ゆききが始終あつた。姫宮だけは今日もなお少女おとめのようなたよりなさで、また若々しさでおいでになった。もう宮廷の人になりきってしまった女御に気づかいがなくおなりになった院は、この姫宮を幼い娘のように思召して、この方の教育に力を傾けておいでになるのであった。

朱雀院すざくの法皇はもう御命数も少なくなったように心細くばかり思召されるのであるが、この世のことなどはもう顧みないことにしたいとお考えになりながらも、女三の宮にだけはもう一度お逢いあそばされたかった。このまま亡なくなって心の残るのはよろしくないことであるから、たいそうにはせず宮が訪ねておいでになることをお言いやり

なつた。院も、

「ごもつともなことですよ。こんな仰せがなくともこちらから進んでお伺いをなさらないければならないのに、ましてこうまでお待ちになつておられるのだから、実行しないではお気の毒ですよ」

とお言いになり、機会をどんなふうにして作ろうかと考えておいでになつた。何でもなくそつと伺候をするようなことはみすばらしくてよろしくない。法皇をお喜ばせかたがた外見の整つたことがさせたいとお思ひになるのである。来年法皇は五十におなりになるのであつたから、若菜の賀を姫宮から奉らせようかと院はお思ひつきになつて、それに付帶した法会ほうえの布施ふせにお出しになる法服しやくの仕度をおさせになり、すべて精進でされる御宴会の用意であるから普通のことと變わつて、苦心の払われることを今からお指図さしずになつていた。昔から音楽がことにお好きな方であつたから、舞の人、楽の人にすぐれたのを選定しようとしておいでになつた。右大臣家の下の二人の子、大將の子を典侍腹のも加えて三人、そのほかの御孫も七歳以上の皆殿上勤めをさせておいでになつた。それらと、兵部卿ひょうぶきやうの宮のまだ元服前の王子、そのほかの親王がたの子息、御親戚しんせきの子供たちを多く院はお選よびになつた。殿上人たちの舞い手も容貌ようぼうがよくて芸のすぐれたのを選

りとのえて多くの曲の用意ができた。非常な晴れな場合と思つてその人たちは稽古けいこを励むために師匠になる専門家たちは、舞のほうのも楽のほうのも繁忙をきわめていた。

女三の宮は琴の稽古を御父の院のお手もとでしておいになったのであるが、まだ少女時代に六条院へお移りになったために、どんなふうにもその芸はなつたかと法皇は不安に思召して、

「こちらへ来られた時に宮の琴の音が聞きたい。あの芸だけは仕上げたことと思うが」と言つておいでになることが宮中へも聞こえて、

「そう言われるのは決して平凡なお手並みでない芸に違いない。一所懸命に法皇の所へ来てお弾ひきになるのを自分も聞きたいものだ」

などと仰せられたということがまた六条院へ伝わつて来た。院は、

「今までも何かの場合に自分からも教えているが、質はすぐれているがまだたいした芸になつていないのを、何心なくお伺いされた時に、ぜひ弾けと仰せになった場合に、恥ずかしい結果を生むことになつてはならない」

とお言いになつて、それから女三の宮に熱心な琴の教授をお始めになつた。変わったものを二、三曲、また大曲の長いのが四季の氣候によつて変わる音、寒い時と空気の暖

かい時によつての弾き方を変えねばならぬことなどの特別な奥義をお教えになるのであつたが、初めはたよりないふうであつたものの、お心によくはいつてきて上手じょうずにおなりになつた。昼は人の出入りの物音の多さに妨げられて、絃いとを揺ゆすつたり、おさえて変わる音の繊細な味を研究おさせになるのに不便なために、夜になつてから静かに教うべきであるとお言いになつて、女王にようおうの了解をお求めになつて院はずつと宮の御殿のほうへお泊まりきりになり、朝夕のお稽古けいこの世話をあそばされた。女御にようぎにも女王にも琴はお教えにならなかつたのであつたから、このお稽古の時に珍しい秘曲もお弾きになるのである。うろことを予期して、女御も得ることの困難なお暇いとをようやく得て帰邸したのであつた。もう皇子を二人お持ちしているのであるが、また妊娠して五月ほどになつていたから、神事の多い季節は御遠慮したいと言つてお暇を願つて来たのである。

十一月が過ぎるともどるようにと宮中からの御催促が急であるのもさしおいて、このごろの樂の音ねのおもしろさに女御は六条院を去りがたいのであつた。なぜ自分には教えていただけなかつたのかと院を恨めしく思いもしていた。普通と変わつて冬の月を最もお好みになる院は、雪のある月夜にふさわしい琴の曲をお弾きになつて、女房の中の樂才のあるのに他に樂器で合奏をさせたりして楽しんでおいでになつた。

年末などはことに対の女王が忙しくていっさいの心配りのほかに、女御、宮たちのための春の仕度したくに追われて、

「春ののどかな気分になった夕方などにこの琴の音をよくお聞きたい」

などと言っていたが年も変わった。

年の初めにまず帝みかどからののはやかな御賀を法皇はお受けになることになっていて、差し合ってはよろしくないと思召し、少したった二月の十幾日のころと姫宮の奉られる賀の日をお定めきになり、楽の人、舞い手は始終六条院へ来てその下稽古を熱心にする日が多かった。

「対の女王がいつもお聞きしたがっているあなたの琴と、その人たちの十三絃げんや琵琶びわを一度合奏する女ばかりの催しをしたい。現代の大家といっても私の家族たちの音楽に対する態度より純真なものを持っていませんよ。私はたいした音楽者ではないが、すべての芸に通じておきたいと思って、少年の時から世間の専門家を師にしてつきもしたし、また貴族の中の音楽の大家たちにも教えを乞うたものですが、特に尊敬すべき芸を持った人と思われるのはなかった。その時代よりもまた現在では音楽をやる人の素質が悪くなって、芸が浅薄になっていると思う。琴などはまして稽古をする者がなくなつたとい

うことですからあなただけ弾ける人はあまりないでしょう」

と院がお言いになると、宮は無邪氣に微笑ほほえんで、自分の芸がこんなにも認められるようになったかと喜んでおいでになった。もう二十一、二でおありになるのであるが、幼稚な所が抜けないで、そして見たお姿だけは美しかった。

「長くお目にかからないでおいでになるのだから、大人になってりっぱになったと認めていただけるようにしてお目にかからなければいけませんよ」

と事に触れて院は教えておいでになるのであった。実際こうした良人おっとがおいでにならなければ外間のいろいろな噂うわさにさえされる方であつたかもしれぬと女房たちは思つていた。

一月の二十日過ぎにはもうよほど春めいてぬるい微風そよかぜが吹き、六条院の庭の梅も盛りになっていった。そのほかの花も木も明日の約されたような力が見えて、杜もりは霞かすみ渡つていた。

「二月になってからでは賀宴したくの仕度で混雑するであろうし、こちらだけですることもその時の下調べのように思われるのも不快だから、今のうちがよい、あちらで会をなさ

と院はお言いになつて女王を寢殿のほうへお誘いになった。供をしたいという希望者は多かつたが、寢殿の人と知り合いになつてゐる以外の人は残された。少し年はいつてゐる人たちであるが、つばな女房たちだけが夫人に添つて行つた。童女は顔のいい子が四人ついて行つた。朱色の上に桜の色の汗衫かざみを着せ、下には薄色の厚織の柏あこめ、浮き模様のある表袴おもてばかま、肌には槌つちの打ち目のきれいなのをつけさせ、身の姿態とりなせも優美なのが選ばれたわけであつた。女御の座敷のほうも春の新しい装飾がしわたされてあつて、華奢かしやを尽くした女房たちの姿はめざましいものであつた。童女は臙脂えんじの色の汗衫かざみに、支那綾しなあやの表袴で、柏あこめは山吹色やまぶきの支那錦にしきのそろいの姿であつた。明石夫人の童女は目だたせないような服装をさせて、紅梅色を着た者が二人、桜の色が二人で、下は皆青色を濃淡にした柏で、これも打ち目のでき上がりのよいものを下につけさせてあつた。姫宮のほうでも女御や夫人たちの集まる日であつたから、童女の服装はことによくさせてお置きになつた。青丹あおにの色の服に、柳の色の汗衫かざみで、赤紫の柏あこめなどは普通の好みであつたが、なんとなく気高く感ぜられることは疑いもなかつた。縁側に近い座敷の襖子からかみをはずして、貴女たちの席は几帳きちようを隔てにしてあつた。中央の室には院の御座おんざが作られてある。今日の拍子合わせの笛の役には子供を呼ぼうとお言いになつて、右大臣家の三男で玉鬘夫人たまかづらの生

んだ上のほうの子が笙しょうの役をして、左大将の長男に横笛の役を命じ縁側へ置かれてあった。演奏者の茵しほねが皆敷かれて、その席へ院の御秘蔵の楽器が紺錦こんにしきの袋などから出されて配られた。明石夫人は琵琶びわ、紫の女王には和琴わじん、女御は箏そうの十三絃げんである。宮はまだ名楽器などはお扱いにくいであろうと、平生弾いておいでになるので調子を院がお弾き試みになったのをお配らせになった。院は、

「箏そうの琴ことは絃ことがゆるむわけではないが、他の楽器と合わせる時に琴柱こととしの場所が動きやすいものなのだから、初めからその心得でいなければならないが、女の力では十分締めることがむずかしいであろうから、やはりこれは大将に頼まなければならないまい。それに拍子を受け持っている少年たちもあまり小さくて信用のできない点もあるから」

とお笑いになりながら、

「大将にこちらへ」

とお呼び出しになるのを聞いて、夫人たちは恥ずかしく思っていた。明石夫人以外は皆院の御弟子なのであるから、院も大将が聞いて難のないようにとできばえを祈っておいになった。女御は平生から陛下の前で他の人と合奏も仕馴なれているからだいじょうぶ落ち着いた演奏はできるであろうが、和琴というものはむずかしい物でなく、きまっ

たことがないだけ創作的の才が必要なのを、女の弾き手はもてあましはせぬか、春の絃
楽は皆しっくり他に合ってゆかねばならぬものであるが、和琴がうまくいつしよになっ
てゆかぬようなことはないかとも損な弾き手に同情もしておいでになった。

左大将は晴れがましくて、音楽会のいかなる場合に立ち合うよりも気のつかわれるふ
うで、きれいな直衣のうしを薫香たきものの香のよく染しんだ衣服に重ねて、なおも袖そでをたきしめること
を忘れずに整った身姿みなりのこの人が現われて来たころはもう日が暮れていた。感じのよい
早春の黄昏たそがれの空の下に梅の花は旧年に見た雪ほどたわなに咲いていた。ゆるやかな風の
通り通うごとに御簾みすの中の薫香たきものの香も梅花ばっかの匂においを助けるように吹き迷うぐいすつて鶯うぐいすを誘うか
と見えた。御簾の下いとのほうから箏そうの琴ことのさきのほうを少しお出しになって、院が、
「失礼だがこの絃いとの締めまりぐあいをよく見て調音をしてほしい。他人に来てもらうこと
のできない場合だから」

とお言いになると、大将はうやうやしく琴を受け取って、一越調いっこつの音ねに発はつの絃いとの標準
の柱じを置き全体を弾き試みることはせずにそのまま返そうとするのを院は御覧になっ
て、

「調子をつけるだけの一弾きは気どらずにすべきだよ」

と院がお言いになった。

「今日の会に私がいささかでも音を混ぜますようなだいそれた自信は持つておりません」

大將は遠慮してこう言う。

「もつともだけれども、女だけの音楽に引きさがった、逃げたと言われるのは不名誉だろう」

院はお笑いになった。で大將は調子をかき合わせて、それだけで御簾みすの中へ入れた。院の御孫にあたる小さい人たちが美しい直衣姿のうしをして吹き合わせる笛の音はまだ幼稚ではあるが、有望な未来の思われる響きであった。かき合わせが済んでいよいよ合奏になったが、どれもおもしろく思われた中に、琵琶びわはすぐれた名手であることが思われ、神さびた撥はち使いで澄み切った音をたてていた。大將は和琴に特別な関心を持っていたが、それはなつかしい、柔らかな、愛嬌あいせうのある爪音つまおとで、逆にかく時の音が珍しくはなやかで、大家のもったいらしくして弾くのに少しも劣らない派手はでな音は、和琴にもこうした弾き方があるかと大將の心は驚かされた。深く精進を積んだ跡がよく現われたことによつて院は安心をあそばされて夫人をうれしくお思いになった。十三絃の琴は他の楽器

の音の合い間合い間に繊細な響きをもたらすのが特色であって、女御の爪音つまおとはその中にもきわめて美しく艶えんに聞こえた。琴は他に比べては洗練の足らぬ芸と思われたが、お若い稽古盛りの年ごろの方であつたから、確かな弾き方はされて、ほかの楽器と交響する音もよくて、上達されたものであると大将も思った。この人が拍子を取つて歌を歌つた。院も時々扇を鳴らしてお加えになるお声が昔よりもまたおもしろく思われた。少し無技巧的におなりになつたようである。大将も美音の人で、夜のふけてゆくにしたがつて音楽三昧さんまいの境地が作られていった。月がややおそく出るころであつたから、燈籠とうろうが庭のそこここにともされた。院が宮の席をおのぞきになると、人よりも小柄なお姿は衣服だけが美しく重なつていように見えた。はなやかなお顔ではなくて、ただ貴族らしいお美しさが備わり、二月二十日ごろの柳の枝がわずかな芽の緑を見せているようで、鶯うぐいすの羽風にも乱れていくかと思われた。桜の色の細長を着ておいでになるのであるが、髪は右からも左からもこぼれかかつてそれも柳の糸のようである。これこそ最上の女の姿というものであるうと院はおながめになるのであつたが、女御には同じような艶えんな姿に今一段光る美の添つて見える所があつて、身のとりなしに気品のあるのは、咲きこぼれた藤ふじの花が春から夏に続いて咲いているころの、他に並ぶもののない優越した朝ぼらけ

の趣であると院は御覧になった。この人は身ごもっていて、それがもうかなりに月が重
なつて悩ましいころであつたから、濟んだあとでは琴を前へ押しやつて苦しうに脇息きようそく
へよりかかつているのであるが、背の高くない身体からだを少し伸ばすようにして、普通の太
きさの脇息へ寄っているのが氣の毒で、低いのを作り与えたい氣もされて憐あわれまれた。紅
梅の上着の上にはらはらと髪のかかつた灯ほかげの姿の美しい横に、紫夫人が見えた。こ
れは紅紫かと思われる濃い色の小桂こうちぎに薄臙脂えんじの細長を重ねた裾すそに余つてゆるやかにた
まつた髪がみごとで、大きさもいい加減な姿で、あたりがこの人の美から放射される光
で満ちているような女王にようおうは、花にたとえて桜といつてもまだあたらなほどの容色なの
である。こんな人たちの中に混じつて明石夫人は当然見劣りするはずであるが、そうと
も思われぬだけの美容のある人で、聡明そうめいらしい品のよさが見えた。柳の色の厚織物の細
長に下へ萌葱もえぎかと思われる小桂こうちぎを着て、薄物の簡単な裳もをつけて卑下した姿も感じがよ
くて侮あなずらわしくは少しも見えなかつた。青地の高麗錦こまにしきの縁ふちを取った敷き物の中央にも
すわらずに琵琶びわを抱いて、きれいに持った撥はちの尖さきを絃いとの上に置いているのは、音を聞く
以上に美しい感じの受けられることであつて、五月の橘たちばなの花も実もついた折り枝が思わ
れた。いずれもつつましくしているらしい内のものの氣配けはいに大将の心は惹ひかれるばかり

であつた。紫の女王の美は昔の野分の夕べよりもさらに加わっているに違いないと思うと、ただその一事だけで胸がとどろきやまない。女三にょさんの宮みやに対しては運命が今少し自分に親切であつたなら、自身のものとしてこの方を見ることができたのであつたと思うと、自身の臆病おくびょうさも口惜くちおしかった。朱雀院すざくからはたびたびそのお気持ちを示され、それとなく仰せになったこともあつたのであるがと思ひながらも、よく隙すきの見えることを知つていては女王に惹かれたほど心は動きもしないのであつた。女王とはだれも想像ができぬほど遠い間隔のある所に置かれている大將は、その忘れがたい感情などは別として、せめて自分の持つ好意だけでも紫の女王に認めてもらうだけ望んでできないのを考へては煩悶はんもんしているのである。あるまじい心などはいだいていない、その思いを抑制することはできる人である。

夜がふけてゆくらしい冷ややかさが風に感ぜられて臥待月ふしまちづきが上り始めた。

「たよりない春の朧月夜おぼろだ。秋のよさというのもまたこうした夜の音楽と虫の音がいっしょに立ち上つてゆく時にあるものだね」

と院は大將に向かつてお言ひになつた。

「秋の明るい月夜には、音楽でも何の響きでも澄み通つて聞こえますが、あまりきれい

に作り合わせたような空とか、草花の露の色とかは、専念に深く音楽を味わわせなくなる気もいたします。やはり春のたよりない雲の間から朧な月が出ますほどの夜に、静かな笛の音などの上つてゆくのを聞きますほうが、音楽そのものを楽しむのにはよいかと思われまゝ。女は春を憐^{あわれ}むという言葉がございますがもつともなことと思われまゝ。すべてのものの調子がしっくり合うのは春の夕方に限るように考えられますが」

と大将が言うと、

「それは断定的には言えないことだ。古人でさえ決めかねたことなのだから、末世のわれわれの力で正しい批判のできるわけもない。ただ音楽のほうでは秋の律の曲を、春の呂^{りょ}の曲の下に置かれていることだけは今君が言ったような理由があるからだろう」

院はこう仰せられた。また、

「どう思うかね。現在の優秀な音楽家とされている人たちの、宮中などのお催しなどの場合に演奏を命ぜられる人のを聴^きいても名人だと思われるのは少なくなったようだが、先輩についてよく研究をしようとするような熱心が足りないのかね。今日のような女ばかりの音楽の会に交じっても、格別きわだつと思われる人があるようにも思われない。しかしそれは近年の私がどこへも行かずに一所に引きこもっていて、鑑識が悪く偏して

しまったのかもしれないが、とにかく感激を覚えさせられる音楽者のいないのは残念だ。どんな芸事も演ぜられる場所によつては平生と違つたできばえを見せるものであるが、最も晴れの場所の宮中でのこのごろの音楽の遊びに選出される人たちに、この女性たちのを比べて劣っていると思う点があるかね」

「それを申し上げたいと思つたのですが、しかし頭の悪い私はでたらめを申すことになるかもしれません。今の世間の者は昔の音楽の盛んな時を知らないからでもありますか衛門督えもんのかきみの和琴、兵部卿ひょうふきやうの宮様の琵琶びわなどを激賞いたします。私どもも妙技とはしておりますが、今晚の皆様の御演奏には驚愕きやうがくいたしました。はじめはたいしたお遊びでもあるまいと軽く考えていたためにいつそう感激が大きいのでございましょうか。歌の役はまことに気がさして勤めにくうございました。和琴は太政大臣によつてだけすべての楽音を率いるような巧妙な音のたつものと思つておりまして、その境地へは一步も他の者がはいれないものと思われるむずかしい芸でございしますが、今晚のはまた特別なものでございました。結構でした」

大將はほめた。

「そんな最大級の言葉ではめられるほどのものではないのだが」

得意な御微笑が院のお顔に現われた。

「私にはまずできそこねの弟子はないようだね。琵琶だけは私に骨を折らせた弟子の芸ではないがすぐれたものであったはずだ。意外なところで私の発見した天性の弾き手なのだよ。ずいぶん感心したものだ、そのころよりはまた進歩したようだ」

こうして皆御自身の功にしてお言いになるのを聞いていて、女房たちなどは肱を互いに突き合わせたりして笑っていた。

「すべての芸というものは習い始めると奥の深さがわかって、自分で満足のできるだけを習得することはとうていできないものなのだが、しかしそれだけの熱を芸に持つ人が今は少ないから、少しでも稽古を積んだことに自身で満足して、それで済ませていくのだが、琴というものだけはちよつと手がつけられないものなのだよ。この芸をきわめれば天地も動かすことができ、鬼神の心も柔らげ、悲境にいた者も楽しみを受け、貧しい人も出世ができて、富貴な身の上になり、世の中の尊敬を受けるようなことも例のあることなのだ。この芸の伝わった初めの間は、これを学ぶ人は皆長く外国へ行っていて、あらゆる困難に打ち勝って、上達しようとしたものだが、そうまでして成功したものの数はわずかだったのだ。実際すぐれた琴の音は月や星の座を変えさせることもあった

し、その時季でなしに霜や雪を降らせたり、黒雲が湧き出したり、雷鳴がそのためにしたりしたことも昔はあったのだよ。だれも音楽のうちの最高のものと知っていても、完全にその芸を習いおおせるものが少なかったし、末世にはなるし、今残っているのは昔のほんとうのものの断片だけの価値のものかとも思われる。それでもまだ鬼神が耳をとどめるものになっている琴の稽古けいこをなまじいにして、上達はできずにかえっているいろいろな不幸な終わりを見たりする人があるものだから、琴の稽古をする者は不吉を招くというような迷信もできて、近ごろではこの面倒な芸を習う人が少なくなったということだね。遺憾なことだ。琴がなくては世の中の音楽が根本の音を持たないものになるのだからね。すべての物は衰えかけると早い速力で退化する一方なんだから、そんな中で一人の人間だけが熱心にその芸に志して、高麗こうらい、支那しなと渡り歩いて家族も何も顧みない者になつてしまうのも狂的だから、それほどはしなくても、この芸がどんなものであるかを知りうるだけのことを私はしたいと思つて、一曲でも十分に習いうることは困難なものとしても、これにはむずかしい無数の曲目のあるものなのだから、若くて音楽熱の盛んな年ごろの私は世の中にあるだけの琴の譜を調べたり、あちらから来ているものは皆手もとへ取り寄せて、それによつて研究をしたが、しまいには私以上の力のある先生とい

うものもなくなつて不便だったものの、独学で勉強をしたが、それでも古人の芸に及ぶものでは少しもなかったのだからね。ましてこれからは心細いものになるだろうとこの芸について私は悲しんでいる」

などと院のお語りになるのを聞いていて大將は自身をふがいなく恥ずかしく思った。

「今上きんじょうの親王が御成人になれば、それまで生きているかどうかおぼつかないことだが、その時に私の習いえただけの琴の芸をお授けしようと願っている。二の宮は今からそうした天分を持たれるようだから」

このお言葉を明石夫人あかしは自身の名誉であるように涙ぐんで側聞かたえぎきをしていたのであった。

女御むすめは箏そうを紫夫人に譲つて、悩ましい身を横たえてしまったので、和琴わじんを院がお弾ひきになることになつて、第二の合奏は柔らかい気分の派手はでなものになつて、催馬楽さいばらの葛城かつらぎが歌われた。院が繰り返しの所々で声をお添えになるのが非常に全体を美しいものにした。月の高く上る時間になり、梅花の美もあざやかになつてきた。十三絃げんの箏そうの音は、女御むすめのは可憐かれんで女らしく、母の明石夫人に似た揺ゆの音が深く澄んだ響きをたてたが、女王みづの女王のはそれとは変わつてゆるやかな気分が出て、聴きき手の心に酔いを覚えるほどの愛嬌あいきよう

があり、才のひらめきの添ったものであった。合奏の末段になって呂の調子が律になる所の掻き合わせがいつせいにはなやかになり、琴は五つの調べの中の五六の絃のはじき方をおもしろく宮はお弾きになって、少しも未熟と思われる点がなく、よく澄んで聞こえた。春と秋その他のあらゆる場合に變化させねばならぬ弾法の使いこなしようを院がお教えになったのを誤たずによく会得して弾いておいでになるのに、院は誇りをお覚えになった。小さい御孫たちが熱心に笛の役を勤めたのをかわいく院は思召して、

「眠くなつただろうのに、今晚の合奏はそう長くしないはずでわずかな予定だったのがつい感興にまかせて長く続けていて、それも楽音で時間を知るほどの敏感がなく、思わずおそくなつて、思いやりのないことをした」

とお言いになり、笙の笛を吹いた子に酒杯をお差しになり、御服を脱いでお与えになるのであった。横笛の子には紫夫人のほうから厚織物の細長に袴などを添えて、あまり目だたせぬ纏頭が出された。大將には姫宮の御簾の中から酒器が出されて、宮の御装束一そろいが纏頭にされた。

「変ですね。まず先生に御褒美をお出しにならないで。私は失望した」

院がこう冗談をお言いになると、宮の几帳の下からお贈り物の笛が出た。院は笑いな

がらお受け取りになるのであったが、それは非常によい高麗笛であった。少しお吹きになると、もう退出し始めていた人たちの中で大将が立ちどまって、子息の持っていた横笛を取ってよい音に吹き合わせるのが、至芸と思われるこの音を院はうれしくお聞きになり、これもまた自分の弟子であつたと満足されたのであった。

大将は子供をいっしょに車へ乗せて月夜の道を帰って行つたが、いつまでも第二回のおりの箏の音が耳についていて、遣る瀬なく恋しかった。この人の妻は祖母の宮のお教えを受けていたといつても、まだよくも心にはいらぬうちに父の家へ引き取られ、十三絃もはんばな稽古になつてしまつたのであるから、良人の前では恥じて少しも弾かないのである。すべておおまかに外見をかまわず暮らしていて、あとへあとへ生まれる子供の世話に追われているのであるから、大将は若い妻の感じのよさなどは少しも受け取りえない良人なのである。しかも嫉妬はして、腹をたてなどする時に天真爛漫な所の見える無邪気な夫人なのであった。

院は対のほうへお歸りになり、紫夫人はあとに残つて女三の宮とお話などをして、明け方に去つたが、昼近くなるまで寢室を出なかつた。

「宮は上手になられたようではありませんか。あの琴をどう聞きましたか」

と院は夫人へお話しかけになった。

「初めごろ、あちらでなさいますのを、聞いておりました時は、まだそうおできになるとは伺いませんでした、非常に御上達なさいましたね。ごもつともですわね、先生がそればかりに没頭していらっしゃったのですものね」

「そうですね、手を取りながら教えるのだからこんな確かな教授法はなかったわけですね。あなたにも教えるつもりでいたが、あれは面倒で時間のかかる稽古ですからね、つい実行ができなかったのだが、院の陛下も琴だけの稽古はさせているだろうと言っておられるということを聞くと、お気の毒で、せめてそれくらいことは保護者に選ばれたものの義務としてしなければならぬかという気になって、やり始めた先生なのですよ」

などと仰せられるついでに、

「小さかったころのあなたを手もとへ置いて、理想的に育て上げたいとは思ったものの、そのころの私にはひまな時間がなくて、特別なものの先生になってあげることもできなかつたし、近年はまたいろいろなことが次から次へと私を駆使して、よく世話もしてあげなかつた琴のできのよかつたことで私は光栄を感じましたよ。大将が非常に感

心しているのを見たこともうれしくなりませんでしたよ」

ともおほめになった。そうした芸術的な能力も豊かである上に、今は一方で祖母の義務を御孫の宮たちのために忠実に尽くしていて、家庭の実務をとることに力も不足は少しも見せない夫人であることを院はお思いになり、こうまで完全な人というものは短命に終わるようなこともあるのであると、そんな不安をお覚えになった。多くの女性を御覧になった院が、これほどにも物の整った人は断じてほかにないときめておいでになる紫の女王であった。夫人は今年が三十七であった。同棲どうせいあそばされてからの長い時間を院は追懷あそばしながら、

「祈禱きとうのようなことを半生の年よりもたくさんさせて今年は無理をしないようにあなたは慎むのですね。私がそうしたことは常に気をつけてさせなければならぬのだが、ほかのことに紛れてうっかりとしている場合もあるだろうから、あなた自身で考えて、ああしたいというようにくぶん大きな仏事の催しでもあれば、言ってくればいくらでも用意をさせますよ。北山の僧都そうずがなくなっておしまいになったことは惜しいことだ。親戚しんせきとせずにもりっぱな宗教家でしたがね」

ともお言いになった。また、

「私は生まれた初めからすでにたいそうに扱われる運命を持っていたし、今日になって得ている名誉も物質的のしあわせも珍しいほどの人間ともいつてよいが、また一方ではだれよりも多くの悲しみを見て来た人とも言えるのです。母や祖母と早く別れたことに始まって、いろいろな悲しいことが私のまわりにはありましたよ。それが罪業を軽くしたことになって、こうして思いのほか長生きもできるのだと思いますよ。あなたは私とあの別居時代のにがい経験をしてからはもう物思いも煩悶はんもんもなかったろうと思われる。

お后ごうと言われる人、ましてそれ以下の宮廷の人には人との競争意識でみずから苦しましい人はいないですよ。親の家にいるままのようにして今日まで来たあなたのような気楽はだれにもないものなのですよ。この点だけではあなたがだれよりも幸福だったということがわかりますか。思いがけなく姫宮をこちらへお迎えしなければならぬことになってからは、少しの不愉快はあるでしょうがね、それによつて私の愛はいつそう深まっているのだが、あなたは自身のことだからわかつていないかもしれない。しかし物わりのいい人だから理解していてくれるかもしれないと頼みにしていますよ」

と院がお言いになると、

「お言葉のように、ほかから見ますれば私としては過分な身の上になっているのです

が、心には悲しみばかりがふえてまいります。それを少なくしていただきたいと神仏に
はただそれを私は祈っているのですよ」

言いたいことをおさえてこれだけを言った女王に貴女らしい美しさが見えた。

「ほんとうは私はもう長く生きていられない気がしているのでございますよ。この厄年
までもまだ知らない顔でこのままですことは悪いことと知っています。以前からお
願ひしていることですから、許していただけましたら尼になります」

とも夫人は言った。

「それはもつてのほかのことですよ。あなたが尼になってしまったあとの私の人生はど
んなにつまらないものになるだろう。平凡に暮らしてはいるようなものの、あなたと睦
まじくして生きているということよりよいことはない私は信じているのです。あなた
だけをどんなに私が愛しているかということを、これからの長い時間に見ようと思つて
ください」

院がこうお言いになるのを、またもいつもの慰め言葉で自分の信仰にはいる道をおは
ばみになると聞いて、夫人の涙ぐんでいるのを院は憐れあわれに思ひになつて、いろいろな
話をし出して紛らせようとおつとめになるのであつた。

「そうおおぜいではありませんが、私の接触した比較的優秀な女性について言ってみると、女は何よりも性質が善良で落ち着いた考えのある人が一等だと思われるが、それがなかなか望んで見いだせないものなのです。大將の母とは少年時代に結婚をして、尊重すべき妻だとは思っていましたが、仲をよくすることができずに、隔てのあるままで終わったのを、今思うと気の毒で堪えられないし、残念なことをしたと後悔もしていないが、また自分だけが悪いのでもなかったと一方では考えられもするのです。りっぱな貴婦人であったことは間違いないことで、なんらの欠点はなかったが、ただあまりに整然ととのつたのが堅い感じを受けさせてね。少し賢過ぎるといつていいような人で、話で聞けば頼もしいが、妻にしては面倒な氣のするというような女性でしたよ。中宮ぐうの母君の御息所みやすどころは、高い見識の備わった才女の例には思い出される人だが、恋人としてはきわめて扱いにくい性格でしたよ。怨むうらのが当然だと一通りは思われることでも、その人はそのままそのことを忘れずに思いつめて深く恨むのですから、相手は苦しくならなかった。自己を高く評価させないではおかまいという自尊心が年じゅう付きまわっているような氣がして、そんな場合に自分は氣に入らない男になるかもしれないと、あまりに見栄を張り過ぎるような私になって、そして自然に遠のいて縁が絶えたの

ですよ。私が無二無三に進み寄つてあるまじい名の立つ結果を引き起こしたその人の眞価を知っているだけなお捨ててしまったのが済まないことに思われて、せめて中宮にはよくお尽くししたいと、それも前生の約束だったのでしようが、こうして子にしてお世話を申していることで、あの世からも私を見直しているでしょうよ。今も昔も浮わついた心から人のために気の毒な結果を生むことの多い私ですよ」

なお幾人かの女の上を院はお語りになつた。

「女御のあの後見役はたいしたものではあるまいと軽く見てかかつた相手ですが、それが心の底の底までは見られないほどの深い所のある女でしたからね。うわべは素直らしく柔順には見えながら、自己を守る堅さが何かの場合に見える伶俐なたちなのですよ」

と院がお言いになると、

「ほかの方は見ないのですからわかりませんけれど、あの方にはおりおりお目にかかつていますが、聡明で聡明で御自身の感情を少しもお見せにならないのに比べて、だれにも友情を押しつける私をあの方はどう御覧になつていらつしやるかときまりが悪くてね。しかしとにもかくにも女御は私をいようにだけ解釈してくださるだろうと思つています」

夫人にとつてはねたましく思われた人であつた明石夫人をさえこんなに寛大な心で見ようになつたのも、女御を愛する心の深いからであらうと院はうれしく思召した。

「あなたは恨む心もある人だが思いやりもあるから私をそう困らせませんね。たくさん女の中でああなたの真似のできる人はない。あまりにりっぱ過ぎるわけですね」

微笑して院はこうお言いになる。

夕方になつてから、

「宮がよくお弾きになつたお祝いを言つてあげよう」

と言つて、院は寢殿へお出かけになつた。自分があるために苦しんでいる人がほかにあることなどは念頭になくて、お若々しく宮は琴の稽古を夢中になつてしておいでになつた。

「もう琴は休ませておやりなさい。それに先生をよく歓待なさらなければならぬでしょう。苦しい骨折りのかいがあつて安心してよいでできたよ」

と院はお言いになつて、楽器は押しやつて寝ておしまいになつた。

対のほうでは寢殿泊まりのこうした晩の習慣で女王は長く起きていて女房たちに小説を読ませて聞いたりしていた。人生を写した小説の中にも多情な男、幾人も恋人を作る

人を相手に持つて、絶えず煩悶はんもんする女が書かれてあつても、しまいには二人だけの落着いた生活が営まれることに皆なっているようであるが、自分はどうかろう、晩年になつてまで一人の妻にはなれずにいるではないか、院のお言葉のように自分は運命に恵まれているのかもしれないが、だれも最も堪えがたいこととする苦痛に一生付きまとわれないければならぬのであろうか、情けないことであるなどと思ひ續けて、夫人は夜がふけてから寢室へはいつたのであるが、夜明け方から病になつて、はなはだしく胸が痛んだ。女房が心配して院へ申し上げようと言つてゐるのを、

「そんなことをしては済みませんよ」

と夫人はとめて、非常な苦痛を忍んで朝を待った。発熱までもして夫人の容体は悪いのであるが、院が早くお歸りにならないのをお促しすることもなしにゐるうち、女御のほうから夫人へ手紙を持たせて来た使いに、病氣のことを女房が伝えたために、驚いた女御から院へお知らせをしたために、胸を騒がせながら院が歸つておいでになると、夫人は苦しそうなふうで寝ていた。

「どんな気持ちですか」

とお言いになり、手を夜着の下に入れてごらになると非常に夫人の身体からだは熱い。昨

日話し合われた厄年のことも思われて、院は恐ろしく思召されるのであった。粥^{かゆ}などを作って持って来たが夫人は見ることにすらもいやがった。院は終日病床にお付き添いになって看護をしておいでになった。ちよつとした菓子なども口にせず起き上がらないまま幾日かたった。どうなることかと院は御心配になつて祈^{きと}禱^うを数知らずお始めさせになった。僧を呼び寄せて加持^{かじ}などもさせておいでになった。どこが特に悪いともなく夫人は非常に苦しがるのである。胸の痛みの時々起こるおりなども堪えがたそうな苦しみが見えた。いろいろな養生^{ようじやう}もまじないもするがききめは見えない。重い病氣をしていても時さえたてばなおる見込みのあるのは頼もしいが、この病人は心細くばかり見えるのを院は悲しがつておいでになった。もうほかのことをお考へになる余裕がないために、法皇の賀のことも中止の状態になった。法皇の御寺^{みでら}からも夫人の病をねんごろにお見舞いになる御使いがたびたび来た。

夫人の病氣は同じ状態のまま二月も終わつた。院は言い尽くせぬほどの心痛をしておいでになつて、試みに場所を変えさせたらとお考へになつて、二条の院へ病女王をお移しになつた。六条院の人々は皆大厄難^{やくなん}が来たように、悲しんでいる。冷泉院^{れいぜい}も御心痛あそばされた。この夫人にもしものがあれば六条院は必ず出家を遂げられるであろ

うことは予想されることであつたから、大将なども誠心誠意夫人の病氣回復をはかるために奔走しているのであつた。院が仰せられる祈禱きとうのほかに大将は自身の志での祈禱もさせていた。少し知覚の働く時などに夫人は、

「お願いしていますことをあなたは拒こばみになるのですもの」

と、院をお恨みした。力の及ばぬ死別にあうことよりも、生きながら自分から遠く離れて行かせるようなことを見ては、片時も生きるに堪えない気があそばされる院は、

「昔から私のほうが出家のあこがれを多く持つていながら、あなたが取り残されて寂しく暮らすことを思うのは、堪えられないことなので、こうしてまだ俗世界に残っているのに、逆にあなたが私を捨てようと思うのですか」

こんなにはかりお言いになつて御同意をあそばされないのが悪いのか、夫人の病体は頼み少なく衰弱していった。もう臨終かと思われることも多いためにまた尼にさせようかとも院はお惑いになるのであつた。こんなことで女三によさんの宮みやのほうへは仮の訪問すらあそばされなかつた。どこでも楽器はしまひ込まれて、六条院の人々は皆二条のほうへ集まつて行つた。このお邸やしきは火の消えたようであつた。ただ夫人たちだけが残っているのであるが、これを見れば六条院のはなやかさは紫の女王一人のために現出されていたこ

どのように思われた。女御も二条の院のほうへ来て御父子で看護をされた。

「あなたは普通のお身体からだでないのですから、物怪もののけの徘徊はいかいする私の病室などにはおいでにならないで、早く御所へお帰りなさいね」

と、病苦の中でも夫人は心配して言うのであった。若宮のおかわいらしいのを見ても夫人は非常に泣くのであった。

「大きくおなりになるのを拝見できないのが悲しい。お忘れになるでしょう」
などと言うのを聞く女御も悲しかった。

「そんな縁起でもないことを思っではいけませんよ。悪いようでもそんなことにはならないだろうと思う自身の性格で運命も支配していくことになりますからね。狭い心を持つ者は出世をしても寛大な気持ちでいられないものだから失敗する。善良な、おおやかな人は自然に長命を得ることになる例もたくさんあるのだから、あなたなどにそんな悲しいことは起こってきませんよ」

などと院はお慰めになるのであった。神仏にも夫人の善良さ、罪の軽さを告げて目に見えぬ加護を祈らせておいでになるのである。修法しゅぼうをする阿闍梨あじやりたち、夜居よいの僧などは院の御心痛のはなはだしさを拝見することの心苦しさに一心をこめて皆祈った。少し快

い日が間に五、六日あつて、また悪いというような容体で、幾月も夫人は病床を離れることができなかったから、やはり助かりがたい命なのかと院はお歎なげきになった。物怪もののけで人に移されて現われるものもない。どがが悪いということもなくて日に添えて夫人は衰弱していくのであつたから、院は悲しくばかり思召おもほしめされて、いつさいほかのことはお思おもいになれなかつた。

あの衛門督えもんのかみは中納言になつていた。衛門督の官も兼ねたままである。当代の天子の御信任を受けてはなやかな勢力のついてくるにつけても、失恋の苦を忘れかねて、女三の宮の姉君の二の宮と結婚をした。これは低い更衣こうい腹の内親王であつたから、心安い氣がして格別の尊敬を妻に払う必要もないと思つて、院からお引き受けをしたのである。普通の人に比べてはすぐれた女性ではおありになつたが初めから心に沁しんだ人に変えるだけの愛情は衛門督に起こらなかつた。ただ人目に不都合でないだけの良人おとこの義務を尽くしているに過ぎないのであつた。今も以前の恋の続つづきにその方のことを聞き出す道具に使っている女三の宮の小侍従という女は、宮の侍従の乳母めのとの娘なのである。その乳母の姉が衛門督の乳母であつたから、この人は少年のころから宮のお噂うわさを聞いていた。お美しいこと、父帝が溺愛できあいしておいになることなどを始終聞かされていたのがこの恋の萌きざし

芽しになったのである。

六条院が病夫人と二条の院へお移りになっていて、ひまであろうことを思つて小侍従を衛門督は自邸へ迎えて、熱心に話すのはまたそのことについてであつた。

「昔から命にもかかわるほどの恋をしていて、しかも都合のよいあなたという手蔓てづるを持っていて、宮様の御様子も聞くことができ、私の煩悶はんもんしていることも相当にお伝えしてもらっているはずなのだが、少しも見るに足る効果がないから残念でならない。あなたが恨めしくなるよ。法皇様さえも、宮様が幾人もの妻の中の一人におなりになって、第一の愛妻はほかの方であるというわけで、一人お寝やすみになる夜が多く、つれづれに暮らしておいでになるのをお聞きになつて、御後悔をあそばしたふうで、結婚をさせるのであつたら普通人の忠実な良人おつとを宮のために選ぶべきだつたと言ひになり、女二によにの宮みやはかえつて幸福で将来が頼もしく見えるではないかと仰せられたということを私は聞いて、お気の毒にも、残念にも思つて煩悶しないではいられないではないか。私の宮さんも御姉妹きょうだいではあるが、それはそれだけの方としておくのだよ」

と衛門督えもんのかみが歎息たんそくをしてみせると、小侍従は、

「まあもつたいない。それはそれとしてお置きになつて、また何をどうしようというの

でしょう」

とがめた。衛門督は微笑を見せて、

「まあ世の中のこととは皆そうしたもので、表も裏もあるものなのだよ。私が三の宮さんの熱心な求婚者であったことは、法皇様も陛下もよく御承知で、陛下はその時代に十分見込みはありそうだよ、とも仰せられたものなのだが、もう少しの御好意が不足していたわけだと私は思っている」

などと言う。

「それはだめですよ。むしろかしいことですよ。運命もありますし、六条院様が求婚者になつて現われておいでになつては、どの競争者だつて勝ち味はないと思いますけれど、あなただけはたいへんな御自信があつたのですね。近ごろになりましたこそ御官服の色が濃くおなりになつたようでございますがね」

こんなふうにかくし立てる小侍従の攻撃にはかなわないことを衛門督は思った。

「もう昔のことは言わないよ。ただね、このごろのようなまたとない好機会にせめてお居間の近くへまで行つて、私の苦しんでよくねんいる心を少しでも話させてくれることを計らつてくれないか。もつたいない欲念などは見ていてごらん、もういつさい起こさない

ことにあきらめているのだから、いいだろう」

「それ以上のもつたいない欲心がありますかしら。恐ろしい望みをお起こしになったものですね、私は出てまいらなければよかった」

強硬に小侍従は拒む。

「ひどいことを言うものではないよ。たいそうらしく何を言うのだ。后といっても恋愛問題をおこしてお起こしになった人もないわけではないよ。まして宮中のことではなしさ、ほかからは結構なお身の上に見られておいでになっても、口惜くちおしいこともあれでは多かろうじゃないか。法皇様からはどのお子様よりも大事がられて御成人なすつて、今は同じだけの御身分でない方と同等の一人の夫人で、しかも最愛の方としてはお扱われにならないというくわしいことを私は知っているのだよ。人は無常の世界にいるのだから、君が宮の御幸福をこうして守ろうとしていることが皆むだなことになるかもしれないからね。私に冷酷なことを言っておかないほうがいいよ」

「人ほど大事がられない奥様だと言いになって、それをあなたの力でよくしていただけるというのですか。六条院様と宮様は普通の夫婦おぼしめというのでもありませんよ。保護者もなく一人でおいでになりますよりはという思召おぼしめしで親代わりにお頼みになったのです

もの。院がお引き受けになりましたのもその気持ちでなすったことですもの、つまらないことを言つて、結局は宮様を悪くあなたはおっしゃるのですね」

ついには腹をたててしまった小侍従の機嫌きげんを衛門督えもんのかみはとつていた。

「ほんとうのことを言えば、あのまれな美貌びぼうの六条院様を良人おっとにお持ちになる宮様に、お目にかかつて自身が好意を持たれようとは考えても何もないのだよ。ただ一言を物越しに私がお話しするだけのことで、宮様の尊厳をそこねることはないじゃないか。神や仏にでも思っていることを言つて咎とがや罰を受けはしないじゃないか」

こう言つて衛門督は絶対に不浄なことは行なわないという誓いまでも立てて、ひそかに御訪問をするだけの手引きを頼むのを、初めのうちは強硬にあるまじいことであると小侍従は突きはねていたが、もともとあさはかな若い女房であるから、こうまでも思い込むものかと、熱心な頼みに動かされて、

「もしそんなことによいような隙すきが見つかりましたら御案内いたしましょう。院がおいでにならぬ晩はお几帳きちょうのまわりに女房がたくさんいます。お帳台には必ずだれかが一人お付きしているのですから、どんな時にそうしたよいおりがあるものでしょうかね」

と困つたように言いながら小侍従は歸つて行つた。

どうだろう、どうだろうと毎日のように衛門督から責めて来られる小侍従は困りながらしまいにある隙すきのある日を見つけて衛門督へ知らせてやった。督は喜びながら目だたぬふうを作つて小侍従を訪ねて行つた。衛門督自身もこの行動の正しくないことは知っているのであるが、物越しの御様子に触れては物思いがいつそうつのるはずの明日までは考えずに、ただほのかに宮のお召し物の棲先つまずきの重なりを見るにすぎなかつたかつての春の夕べばかりを幻に見る心を慰めるためには、接近して行つて自身の胸中をお伝えして、それから一行の文のお返事ふみを得ることもなればというほどの考えで、宮が憐あわれんでくださるかもしれぬというはかない希望をいだいている衛門督でしかなかつた。これは四月十幾日のことである。明日は賀茂かもの齋院みそぎの御禊きよぐさのある日で、御姉妹きょうだいの齋院のためには儀装車に乗せてお出しになる十二人の女房があつて、その選にあつた若い女房とか、童女とかが、縫い物をしたり、化粧をしたりしている一方では、自身らどうして明日の見物に出ようとする者もあつて、仕度したくに大騒さわぎをしていて、宮のお居間のほうにいる女房の少ない時で、おそばにいるはずの按察使あぜちの君も時々通つて来る源中将が無理に部屋へやのほうへ呼び寄せたので、この小侍従だけがお付きしているのであつた。よいおりであると思つて、静かに小侍従はお帳台の中の東の端へ衛門督の席を作つてやつた。こ

れは乱暴な計らいである。宮は何心もなく寝ておいでになったのであるが、男が近づいて来た^{けはい}気配をお感じになって、院がおいでになったのかとお思いになると、その男はかしまった様子を見せて、帳台の床の上から宮を下へ抱きおろそうとしたから、夢の中でもものに襲われているのかとお思いになって、しいてその者を見ようとあそばすと、それは男であるが院とは違った男であった。これまで聞いたこともおありにならぬような話を、その男はくどくどと語った。宮は気味悪くお思いになって、女房をお呼びになったが、お居間にはだれもいなかったからお声を聞きつけて寄って来る者もない。宮はお^{ふる}怖い出しになって、水のような冷たい汗もお身体^{からだ}に流しておいでになる。失心したようなこの姿が非常に御可憐^{かれん}であった。

「私はつまらぬ者ですが、それほどお憎まれするのが至当だとは思われません。昔からもったいない恋を私はいだいておりましたが、結局そのままにしておけば闇^{やみ}の中で始末もできたのですが、あなた様をお望み申すことを発言いたしましたために、院のお耳にはいり、その際はもつてのほかのこととも院は仰せられませんでした。それも私の地位の低さにあなた様を他へお渡しする結果になりました時、私の心に受けました打撃はどんなに大きかったですでしょう。もうただ今になってはかいのないことを知っております

て、こうした行動に出ますことは慎んでいたのですが、どれほどこの失恋の悲しみは私の心に深く食い入っていたのか、年月がたてばたつほど口惜くちおしく恨めしい思いがつのつていくばかりで、恐ろしいことも考えるようになりました。またあなた様を思う心もそれとともに深くなるばかりでございました。私はもう感情を抑制することができなくなりまして、こんな恥ずかしい姿であるまじい所へもまいりましたが、一方では非常に思いやりのないことを自責しているのですから、これ以上の無礼はいたしません」

こんな言葉をお聞きになることによつて、宮は衛門督えもんのかみであることをお悟りになった。非常に不愉快にお感じにもなったし、怖ろしくもまた思召おぼしめされもして少しのお返辞もあそばさない。

「あなた様がこうした冷ややかなお扱いをなさいますのはごもつともですが、しかしこんなことは世間に例のないことではないのでございますよ。あまりに御同情の欠けたふうをお見せになれば、私は情けなさに取り乱してどんなことをするかもしれません。かわいそうだとだけ言ってください。そのお言葉を聞いて私は立ち去ります」

とも、手を変え品を変え宮のお心を動かそうとして説く衛門督であつた。想像しただけでは非常な尊厳さが御身を包んでいて、目前で恋の言葉などは申し上げられないもの

のように思われ、熱情の一端だけをお知らせし、その他の無礼を犯すことなどは思いも寄らぬことにしていた督であつたにかかわらず、それほど高貴な女性とも思われない、たぐいもない柔らかさと可憐な美しさ^{かれん}がすべてであるような方を目に見てからは、衛門督の欲望はおさえられぬものになり、どこへでも宮を盗み出して行つて夫婦になり、自分もそれとともに世間を捨てよう、世間から捨てられてもよいと思うようになった。

少し眠つたかと思うと衛門督は夢に自分の愛している猫^{ねこ}の鳴いている声を聞いた。それは宮へお返ししようと思つてつれて来ていたのであつたことを思い出して、よいなことをしたものだと思つた時に目がさめた。この時にはじめて衛門督は自身の行為を悟つたのである。が宮はあさましい過失をして罪に墮^おちたことで悲しみにおぼれておいでになるのを見て、

「こうなりましたことによりまして、前生の縁がどんなに深かつたかを悟つて下さいませ。私の犯した罪ですが、私自身も知らぬ力がさせたのです」

不意に猫が端を引き上げた御簾^{みす}の中に宮のおいになつた春の夕べのこと^{えもんのかみ}も衛門督は言い出した。そんなことがこの悲しい罪に墮^おちる因をなしたのかと思召^{おぼしめ}すと、宮は御自身^{みづかみ}の運命を悲しくばかり思召されるのであつた。もう六条院にはお目にかかれないこと

をしてしまった自分であるとお思になることは、非常に悲しく心細くて、子供らしくお泣きになるのを、もったいなくも憐れにも思つて、自分の悲しみと同時に恋人の悲しむのを見るのは堪えがたい気のする督であつた。夜が明けていきそうなのであるが、歸つて行けそうにも男は思われない。

「どうすればよいのでしょうか。私を非常にお憎みになつていますから、もうこれきり逢つてくだらないことも想像されますが、ただ一言を聞かせてくださいませんか」

宮はいろいろとこの男からお言われになるのもうるさく、苦しくて、ものなどは言おうとしてもお口へ出ない。

「何だか気味が悪くさえなりましたよ。こんな間柄というものがあるでしょうか」

男は恨めしいふうである。

「私のお願ひすることはだめなのでしょう。私は自殺してもいい気にもとからなつてゐるのですが、やはりあなたに心が残つて生きていましたものの、もうこれで今夜限りで死ぬ命になったかと思ひますと、多少の悲しみはございますよ。少しでも私を愛してくださるお心ができましたら、これに命を代えるのだと満足して死ねます」

と言つて、衛門督は宮をお抱きして帳台を出た。隅の室の屏風を引き^{ひら}き^{ひら}げ^{ひら}蔭を作つて

おいて、妻戸をあけると、渡殿わたどのの南の戸がまだ昨夜ゆうべはいつた時のままにあいてあるのを見つけ、渡殿の一室へ宮をおおろした。まだ外は夜明け前のうす闇やみであつたが、ほのかにお顔を見ようとする心で、静かに格子をあげた。

「あまりにあなたが冷淡でいらつしやるために、私の常識というものはすっかりなくされてしまいました。少し落ち着かせてやろうと思召すのでしたら、かわいそうだとだけのお言葉をかけてください」

衛門督が威嚇いかくするように言うのを、宮は無礼だと思ひになつて、何かとがめる言葉を口から出したく思召したが、ただ慄ふるえられるばかりで、どこまでも少女らしいお姿と見えた。ずんずん明るくなつていく。あわただしい氣になつていながら、男は、

「理由のありそうな夢の話も申し上げたかったですけれど、あくまで私をお憎みになりますのもお恨めしくてよしますが、どんなに深い因縁のある二人であるかをお悟りになることもあなたにあるでしょう」

と言つて出て行こうとする男の氣持ちに、この初夏の朝も秋のもの悲しさに過ぎたものが覚えられた。

おきて行く空も知られぬ明けぐれにいつくの露のかかる袖なりそで

宮のお袖を引いて督かみのこう言つた時、宮のお心はいよいよ歸つて行きそうな様子に樂になつて、

あけぐれの空にうき身は消えなん夢なりけりと見てもやむべく

とはかなそうにお言いになる声も、若々しく美しいのを聞きさしたままのようにして、出て行く男は魂だけ離れてあとに残るもののような気がした。

夫人の宮の所へは行かずに、父の太政大臣家へそつと衛門督えもんのかみは来たのであつた。夢と言つてよいほどのはない逢う瀬が、なおありうることは思えないとともに、夢の中に見た猫の姿も恋しく思い出された。大きな過失を自分はしてしまつたものである。生きてゐることがまぶしく思われる自分になつたと恐ろしく、恥ずかしく思つて、督はずつとそのまま家に引きこもつていた。

恋人の宮のためにも済まないことであるし、自身としてもやましい罪人になつてし

まったことは取り返しのつかぬことであると思うと、自由に外へ出て行ってよい自分とは思われなかったのである。陛下の寵姫ちようきを盗みたてまつるようなことをしても、これほどの熱情で愛している相手であつたなら、処罰を快く受けるだけで、このやましさはないはずである。そうした咎とがは受けないであろうが、六条院が憎悪ぞうおの目で自分を御覧になることを想像することは非常な恐ろしい、恥ずかしいことであると衛門督は思つてゐた。

貴女きじよと言つても少し蓮葉はすつばな心が内にあつて、表面が才女らしくもあり、無邪気でもあるような見かけとは違った人は誘惑にもかかりやすく、無理な恋の会合を相手としめし合わせてすることにもなりやすいのであるが、女三にようさんの宮みやは深さもないお心ではあるが、臆病おくひよう一方な性質から、もう秘密を人に発見されてしまったようにも恐ろしがりもし、恥じもしておいでになつて、明るいほうへいざつて出ることすらおできにならぬまでになつておいでになつて、悲しい運命を負つた自分であるとお悟りになつたであろうと思われる。宮が御病氣のようであるという知らせをお受けになつて、六条院は、はなはだしく悲しんでおいでになる夫人の病氣のほかに、またそうした心痛すべきことが起こつたかと驚いて見舞いにおいでになつたが、宮は別にどこが悪いくらいというふうにも見

えなかった。ただ非常に恥ずかしそうにして、そしてめいっておいでになった。院のお目を避けるようにばかりして、下を向いておいでになるのを、久しく訪ねなかつた自分を恨めしく思っているのであらうと、院のお目にそれが憐れにも、いたいたしいようにも映って、紫夫人の容体などをお話しになり、

「もうだめになるのでしょう。最後になつて冷淡に思わせてやりたくないと思えるものですから付いていつているのですよ。少女時代から始終そばに置いて世話をした妻ですから、捨てておけない氣もして、こんなに幾月もほかのことは放擲したふうで付ききりで看護もしていますが、またその時期が来ればあなたによく思つてもらえる私になるでしょう」

などとお言いになるのを、宮は聞いておいでになつて、あの罪は氣ぶりにもご存じないことを、お氣の毒なことのようにも、濟まないことのようにもお思ひになつて、人知れず泣きたい氣持ちでおいでになった。

衛門督の恋はあのことがあつて以来、ますますつのるばかりで、はげしい煩悶を日夜していた。賀茂祭りの日などは見物に出る公達きんだちがおおぜいで来て誘い出そうとするのであつたが、病氣であるように見せて寢室を出ずに物思ひを續けていた。夫人の女二にょにの宮

には敬意を払うふうに見せながらも、打ち解けた良人らしい愛は見せないのである。督は夫人の宮のそばでつれづれな時間をつぶしながらも心細く世の中を思っているのであった。童女が持っている葵あおいを見て、

悔くやしくもつみをかしける葵草神あふひの許せる挿頭かざしならぬに

こんな歌が口ずさまれた。後悔とともに恋の炎はますます立ちぼるようなわけである。町々から聞こえてくる見物車の音も遠い世界のここのように聞きながら、退屈に苦しんでもいるのであった。女二の宮も衛門督えもんのかみの態度の誠意のなさを感じになって、それは何がどうとはおわかりにならないのであるが、御自尊心が傷つけられているように、物思わしくばかり思召された。女房などは皆祭りの見物に出て人少なな昼に、寂しそうな表情をあそばして十三絃げんの琴を、なつかしい音に弾ひいておいでになる宮は、さすがに高貴な方らしいお美しさと艶えんな趣は備わってお見えになるのであるが、ただもう少しの運が足りなかったのだと衛門督は自身のことを思っていた。

もろかづら落ち葉を何に拾ひけん名は睦まじき挿頭なれども

こんな歌をむだ書きにしていた。もったいないことである。

院はまれにお訪ね^{たず}になった宮の所からすぐに帰ることを気の毒にお思いになり、泊まっておいでになったが、病夫人を気づかわしくばかり思っておいでになる所へ使いが来て、急に息が絶えたと知らせた。院はいつさいの世界が暗くなったようなお気持ちで二条の院へ帰ってお行きになるのであったが、車の速度さえもどかしく思っておいでになると、二条の院に近い大路はもう立ち騒ぐ人で満たされていた。邸内からは泣き声が多く聞こえて、大きな不祥事のあることは覆い^{おほ}がたく見えた。夢中で家へおはいりになったが、

「この二、三日は少しお快いようでしたのに、にわかに絶息をあそばしたのでございます」

こんな報告をした女房らが、自分たちも、いっしょに死なせてほしいと泣きむせぶ様子も悲しかった。もう祈祷^{きとつ}の壇は壊^{こぼ}たれて、僧たちもきわめて親しい人たちだけが残つてもそのほかのは仕事じまいをして出て行くのに忙しいふうを見せている。こうしても

う最愛の妻の命は人力も法力も施しがたい終わりになったのかと、院はたえようもない悲しみをお覚えになった。

「しかしこれは物怪もののけの所業だろうと思われる。あまりに取り乱して泣くものでない」

と院は泣く女房たちを制して、またまた幾つかの大願をお立てになった。そしてすぐれた修験の僧をお集めになり、

「これが定きまった命数でも、しばらくその期をゆるめていただきたい、不動尊は人の終わりにしばらく命を返す約束を衆生にしてください。それに自分たちはおすがりする。それだけの命なりとも夫人にお授けください」

こう僧たちは言つて、頭から黒煙を立てると言われるとおりの熱誠をこめて祈つていた。院も互いにただ一目だけ見合わず瞬間が与えられたい、最後の時に見合わせることでできなかった残念さ悲しさから長く救われたいと言つてお歎なげきになる御様子を見ては、とうていこの夫人のあとにお生き残りになることはむずかしからうと思われて、そのことをまた人々の歎くことも想像するにかたくない。

この院の夫人への大きな愛が御仏みほとけを動かしたのか、これまで少しも現われてこなかった物怪が、小さい子供のりうに憑よつて来て、大声を出し始めたのと同時に夫人の呼吸いきは通つて

きた。院はうれしくも思召され、また不安でならぬようにも思召された。物怪は僧たちにおさえられながら言う、

「皆ここから遠慮をするがよい。院お一人のお耳へ申し上げたいことがある。私の霊を長く法力で苦しめておいでになったのが無情な恨めしいことですから、懲らしめを見せようと思いましたが、さすがに御自身の命も危険なことになるまで悲しまれるのを見ては、今こそ私は物怪であっても、昔の恋が残っているために出て来る私なのですから、あなたの悲しみは見過ごせないで姿を現わしました。私は姿など見せなくなかったのだけれど」

と物怪は叫んだ。髪を顔に振りかけて泣く様子は、昔一度御覧になった覚えのある物怪であった。その当時と同じ無気味さがお心に湧いてくるのも恐ろしい前兆のようにお思われになって、その子供の手を院はお捉えとらになって、前へおすわらせになり、あさましい姿はできるだけ人に見させまいとお努めになった。

「ほんとうにその人なのか。悪い狐きつねなどが故人を傷つけるためにでたらめを言うてくることがあるから、確かなことを言うがいい。他人の知らぬことで私にだけ合点のゆくことを何か言ってみるがいい。そうすれば少しは信じてもいい」

院がこうお言いになると、物怪はほろほろと涙を流しながら、悲しそうに泣いた。

「わが身こそあらぬさまなれそれながら空おぼれする君は君なり

恨めしい、恨めしい」

と泣き叫びながらもさすがに羞恥しゆうちを見せるふうが昔の物怪に違ふ所もなかった。嘘うそでないことからかえつてうとましい気がよけいにして情けなくお思われになるので、ものを多く言わすまいと院はされた。

「中宮ちゆうぐうに尽くしてくださいすことはうれしい、ありがたいこととはあの世から見てもありますが、あの世界の人になつては子の愛というものを以前ほど深くは感じないので、恨めしいとお思ひしたあなたへの執着だけがこんなふうにもなつて残つています。その恨みの中でも、生きていますところにほかの人よりも軽くお扱いになつたことよりも、夫婦のお話の中で私を悪くお言いになつたことが私をくやしくさせました。もう私は死んでいるのですから、私が悪くつてもあなたはよくとりなして言つてくださすつていいではありませんか。そうお恨みしただけで、こんな身になつていますと大形な表示おおぎよう

にもなったのです。奥様を深く恨んでいませんが、法の護りが強くて近づけないので反抗してただけです。あなたのお声もほのかに承ることができましたからもういいのです。私の罪の軽くなるような方法を講じてください。修法、読経の声は私にとって苦しい焰ほのおになってまつわってくるだけです。尊い仏の慈悲の声に接したいのですが、それを聞くことのできないのは悲しゅうございます。中宮にもこのことをお話しくださいませ。後宮の生活をするうちに人を嫉妬しつとするような心を起こしてはならない、齋宮をお勤めになった間の罪を御仏みほとけに許していただけるだけの善根を必ずなさい、あの世で苦しむことをよく考えなければならぬとね」

などと言うが、物怪に向かってお話しになることもきまり悪くお思ひになって、物怪がまた出ぬように法の力で封じこめておいて、病夫人を他の室へお移しになった。

紫夫人が死んだという噂うわさがもう世間に伝わって弔詞くやみを述べに来る人たちのあるのを不吉なことに院はお思ひになった。今日の祭りの帰りの行列を見物に出ていた高官たちが、帰宅する途中でその噂を聞いて、

「たいへんなことだ。生きがいのあった幸福な女性が光を隠される日だから小雨も降り出したのだ」

などと解釈を下す人もあった。また、

「あまりに何もかもそろった人というものは短命なものなのだ。『何をさくらに』（待てといふに散らでしとまるものならば何を桜に思ひましまし）」という歌のように、そうした人が長生きしておれば、一方で不幸に甘んじていなければならぬ人も多くできるわけだ。二品の宮が院の御寵愛（ちようあい）を一身にお集めになる日もこれで来るだろう。あまりに気が毒なふうだったからね」

などとも言う人があった。衛門督（えもんのかみ）は引きこもっていた昨日の退屈さに懲りて今日は弟の左大弁、参議などの車の奥に乗って見物に出ていた町で、人の言い合っている噂が耳にはいった時に、この人は一種変わった胸騒ぎがした。「散ればこそいとど桜はめでたけれ」（何か浮き世に久しかるべき）などとも口ずさみながら同車の人々とともに二条の院へ参った。まだ確かでないことであるから、形式を病氣見舞いに行つたのであるが、女房の泣き騒いでいる時であつたから、真実であつたかとさらに驚かれた。ちょうど式部卿の宮がお駈（か）けつけになつた時で、萎（しお）れたふうで宮は内へおはいりになつた。押し寄せて来た多数の見舞い客の挨拶（あいさつ）はまだことごとくは取り次ぎきれずに、家従たちの忙しがっている所へ左大將が涙をふきながら出て来た。

「どんなふうでいらつしやるのですか。不吉なことを言う人があるのを私たちは信じる
ことができないで伺ったのです。ただ長い御疾患を御心配申し上げて参ったのです」

などと衛門督は言つた。

「重態のまま長く病んでおられたのですが、今朝の夜明けに絶息されたのは、それは
物怪もののけのせいだったのです。ようやく呼吸いきが通うようになったと言つて皆一安心しました
が、まだ頼もしくは思われなのですからね。気の毒でね」

と言う大將には実際今まで泣き続けていたという様子が残っていた。目も少しは腫れ
ていた。衛門督は自身のだいそれた心から、大將が親しむこともなかった継母のこと
で、こうまで悲しむのは不思議なことであると目をつけた。こんなふうに高官らも見舞いに
集まつて来たことをお聞きになつて、院からの御挨拶が伝えられた。

「重い病人に急変が来たように見えましたために女房らが泣き騒ぎをいたしましたの
で、私自身もつい心の平静をなくしているおりからですから、またほかの日に改めて御
好意に対するお礼を申しましょう」

院のお言葉というだけで、もう衛門督えもんのかみの胸は騒ぎ立っていたのである。こうした混雑
紛れでなくては自分の来られない場所であることを知っているのであるから腹ぎたない

ふるまいである。

蘇生そせいしたのちをまだ恐ろしいことに院はお願いになって、夫人のためにもろもろの法力の加護をお求めになった。生霊いきりょうで現われた時さえも恐ろしかった物怪が、今度は死霊になっていたのであるから、宗教画に描かれてある恐ろしい形相も想像されて、気味悪く、情けなく思召された院は、中宮のお世話をされることもこの時だけは気の進まぬことに思召されたが、しかしその人には限らず女というものは皆同じように、人間の深い罪の原因もとを作るものであるから、人生のすべてがいやなものに思われるとお考えになり、あれは他人がだれも聞かぬ夫婦の間の話の中にただ少し言ったことに過ぎなかったのにと、そんなことをお思い出しになると、いよいよ愛欲世界がうるさくお考えられになるのであった。ぜひ尼になりたいと夫人が望むので、頭の頂の髪を少し取って、五戒だけをお受けさせになった。戒師が完全に仏の戒めを守る誓いを、仏前で尊い言葉で述べる時に、院は体面もお忘れになり、夫人に寄り添って涙を拭ぬぐいつつ夫人とともに仏を念じておいでになったのを見ると、聡明そうめいな貴人も御愛妻の病に仏へおすがりになる心は凡人に変わらないことがわかった。どんな方法を講じて夫人の病を救い、長く生命いのちを保たせようかと夜昼お歎なげきになるために、院のお顔にも少し痩やせが見えるようになった。

五月などはまして氣候が悪くて病夫人の容体がさわやいでいくとも見えなかったが、以前よりは少しいいようであつた。しかもまだ苦しい日々が時々夫人にあつた。院は物怪の罪を救うために、日ごとに法華經一卷ほけきようずつを供養させておいでになった。そのほか何かと宗教的な営みを多くあそばされた。病床のかたわらで不斷の読經どきようもさせておいでになるのであつて、声のいい僧を選んでそれにはあてておありになった。一度現われて以來おりおり出て物怪は悲しそうなことを言うのであつて、全然退いては行かないのである。暑い夏の日になっていよいよ病夫人の衰弱ははげしくなるばかりであるのを院は歎き続けておいでになった。病に弱つていながらも院のこの御様子を夫人は心苦しく思い、自分の死ぬことは何でもないがこんなにお悲しみになるのを知りながら死んでしまふのは思いやりのないことであろうから、その点で自分はまだ生きるように努めねばならぬと、こんな氣が起つたところから、米湯おもゆなども少しずつは取ることになつたせいか、六月になつてからは時々頭を上げて見ることもできるようになつた。珍しくうれしくお思ひになりながら、なお院は御不安で六条院へかりそめに行つて御覽になることもなかつた。

姫宮はあの事件があつてから煩悶はんもんを続けておいでになるうちに、お身体からだが常態でなく

なつて行つた。御病氣のようにお見えになるが、それほどたいしたことではないのである。六月になつてからは食欲しょくよくが減退して顔色も悪くおやつれが見えるようになった。衛門督は思いあまる時々夢のように忍んで来た。宮のお心には今も愛情が生じているのではおありにならないのである。罪をお恐れになるばかりでなく、風采ふうさいも地位もそれはこれに匹敵する価値のない人であることはむろんであつたし、氣どつて風流男が表面を見て、一般人からは好ましい美男という評判は受けていても、少女時代から光源氏を良人おつとに与えられておいでになつた宮が、比較して御覧になつては、それほど価値に思われる顔でもないのであるから、無礼者であるという御意識以外の何ものもない相手のために、妊娠をあそばされたというのはお氣の毒な宿命である。氣のついた乳母めのとたちは、

「たまにしかおいでにならないで、そしてまたこんなふうに重荷を宮様へお負わせになる」

と院をお恨みしていた。寝やすんでおいでになることをお知りになつて、院は訪ねようとあそばされた。

夫人は暑い時分を清くしていたいと思ひ、髪を洗つてやや爽快そうかいなふうになつていた。

そしてそのまま横になっていたのであるから、早くかわかず、まだぬれている髪は少しのもつれもなく清らかにゆらゆらと、病む麗人に添っていた。青みを帯びた白い顔は美しくてすきとおるような皮膚つきである。虫のもぬけのようにたよりない。しかも長く捨て置かれた二条の院は女王の美の輝きで狭げにさえ見えた。昨日今日になつて人ごちが夫人に帰つてきたことによつて院内が活気づいてにわかに流れも木草も繕われだした。そうした庭をながめても、それが夏の終わりの景色であるのに病臥していた間の月日の長さが思われた。池は涼しそうで蓮の花が多く咲き、蓮葉は青々として露がきらきら玉のように光っているのを、院が、

「あれを御覧なさい。自分だけが爽快がつている露のようじゃありませんか」

とお言いになるので、夫人は起き上がつて、さらに庭を見た。こんな姿を見ることが珍しくて、

「こうしてあなたを見ることのできるのは夢のようだ。悲しくて私自身さえも今死ぬかと思われた時が何度となくあつたのだから」

と、院が目には涙を浮かべてお言いになるのを聞くと、夫人も身にしむように思われ

消え留まるほどやは経^ふべきたまさかに蓮^{はちす}の露のかかるばかりを

と言った。

契りおかんこの世ならでも蓮の葉に玉ゐる露の心隔つな

これは院のお歌である。六条院へはお氣が進まないのであるが、宮中の聞こえと法皇への御同情から、宮の床についておられる知らせを受けていながら、いっしょに住むほうの妻の大病の氣づかしさから訪^{たず}ねて行くこともあまりしなかつたのであるから、女王の病のこんなふうに少しよい間にしばらくあちらの家へ行つていようという心になつて院はお出かけになつた。

宮は心の鬼に院の前へ出ておいでになることが恥ずかしく晴れがましくて、ものをお言ひになる返辞もよくされないのを長い絶え間にこの子供らしい人もさすがに恨んでいたのであろうと院は心苦しくお思ひになり、慰めることにかかつておいでになつた。お世話役の女房をお呼び出しになり、宮の御不快の経過などを院がお聞きになると、それ

は妊娠の徴候があつてのことであるという答えをした。

「今になって全く珍しいことが起こってきたね」

とだけ院はお言いになったが、お心の中では長くそばにいる人たちの中にもそうしたことはないのであるから、不祥なことがこちらで起こっているのではないかというような疑いをお覚えになりながら、それをくわしく聞こうとはされないで、ただ悪阻つわりに悩む人の若い可憐かれんな姿に愛を覚えておいでになった。やつと思ひ立つておいでになったのであるから、すぐにお帰りになることもできず、二、三日おいでになる間にも、二条の院の女王の容体ばかりがお気づかわれになって、そのほうへ手紙ばかりを書き送っておいになった。

「あんなにもしばらくの間にお言いになる感情がたまるのですかね。宮様をとうとうお気の毒な方様とお見上げる時が来ましたよ」

などと宮の御過失などは知らぬ人たちが言う。秘密に携わっている小侍従は院の御滞留の間を無事に過ごしうるかと胸をとどろかせていた。

衛門督えもんのかみは院が六条のほうへ来ておいでになることを聞くと、だいそれた嫉妬しつとを起こして、自己の恋のはげしさをさらに書き送る気になって手紙をよこした。院が暫時さんじ対のほ

うへ行つておいでになる時で、だれも宮のお居間にいない様子を見て、小侍従はそれを宮にお見せした。

「いやなものを読めというのね。私はまた気分が悪くなつてきているのに」

こう言つて、宮はそのまま横におなりになった。

「この端書はしがきがあまりに身にしむ文章なんでございますもの」

小侍従は衛門督の手紙をひろ拡げた。ほかの女房たちが近づいて来たけはい気配を聞いて、手でお几帳きちようを宮のおそばへ引き寄せて小侍従は去つた。宮のお胸がいつそうとどろいている所へ院までも歸つておいでになったために、手紙をよくお隠しになる間がなくて、敷き物の下へはさんでお置きになった。一条の院へ今夜になれば行こうと院は思いになり、そのことを宮へお言いになるのであつた。

「あなたはたいしたことがないようですから、あちらはまだあまりにたよりないようなのを見捨てておくように思われても、今さらかわいそうですから、また見に行つてやろうと思います。中傷する者があつても、あなたは私を信じておいでなさいよ。また忠実な良人おとしになる日が必ずありますよ」

これまではこんな時にも、子供めいた冗談じょうだんなどをお言いになつて、朗らかにしている

方なのであったが、非常にめいっておしまいになり、院のほうへ顔を向けようともされないのを、内にいだく嫉妬しつとの影がさしているとかかり院は思いになった。昼の座敷でしばらくお寝入りになったかと思うと、蝸ひぐらしの啼なく声でお目がさめてしまった。

「ではあまり暗くならぬうちに出かけよう」

と言いながら院がお召しかえをしておいでになると、

「『月待ちて』（夕暮れは道たどたどし月待ちて云々うんぬん）とも言いますのに」

若々しいふうで宮がこうお言いになるのが憎く思われるはずもない。せめて月が出るころまででもいてほしいとお思いになるのかと心苦しくて、院はそのまま仕度したくをおやめになった。

夕露に袖濡そでぬらせとやひぐらしの鳴くを聞きつつ起きて行くらん

幼稚なお心の実感をそのままな歌もおかわいくて、院は膝ひざをおかがめになって、

「苦しい私だ」

と歎息たんそくをあそばされた。

待つ里もいかが聞くらんかたがたに心騒がすひぐらしの声

などと躊躇ちゆうちよをあそばしながら、無情だと思われることが心苦しくてなおい泊してお行きになることにあそばされた。さすがにお心は落ち着かずに、物思いの起こる御様子で晩饗ばんせんはお取りにならずに菓子だけを召し上がった。

まだ朝涼あさすずの間に帰ろうとして院は早くお起きになった。

「昨日の扇をどこかへ失ってしまつて、代わりのこれは風がぬるくていけない」

とお言いになりながら、昨日のうたた寝に扇をお置きになった場所へ行つてごらんになったが、立ち止まつて目をお配りになると、敷き物のある一所の端が少し縊よれたようになった。下から、薄緑うすきよの紙に書いた手紙の巻いたのがのぞいていた。何心なく引き出して御覧になると、それは男の手で書かれたものであった。紙の匂においなどの艶えんな感じのするもので、骨を折った巧妙な字で書かれてあった。二重ねにこまごまと書いたのをよく御覧になると、それは紛れもない衛門督えもんのかみの手跡であった。院のお座の所で鏡をあけてお見せしている女房は御自分の御用の手紙を見ておいでになるものと思つていたが、小侍従がそれを見た時、手紙が昨日の色であることに気がついた。胸がぶつぶつ

と鳴り出した。粥^{かゆ}などを召し上がる院のほうを小侍従はもう見ることもできなかつた。まさかそうではあるまい、そんな運命の悪戯^{いたずら}が不意に行なわれてよいものか、宮はお隠しになったはずであると小侍従は努めて思おうとしている。宮は何もお知りにならずになお眠っておいでになるのである。こんな物を取り散らしておいて、それを自分でない他人が発見すればどうなることであろうとお思になると、その人が軽蔑^{けいべつ}されて、これであるから始終自分はあるがぶながつていたのである。あさはかな性格はついに墮落を招くに至ったのであると院は解釈された。

お帰りになったので、女房たちがあらかた宮のお居間から去った時に、小侍従が来て、

「昨日の物はどうなさいました。今朝^{けさ}院が読んでいらつしやいましたお手紙の色がよく似ておりましたか」

と宮へ申し上げた。はっと思ひになつて宮はただ涙だけが流れに流れる御様子である。おかawaiiそうではあるがふがない方であると小侍従は見ていた。

「どこへお置きになったのでございますか。あの時だれかが参つたものですから、秘密がありそうに思われますまいと、それほどのことは何でもなかつたのですが、よいこと

をしておりますと心がとがめまして、私は退いて行つたのでございますが、院がお座敷へお帰りになりましたまではちよつと時間があつたのでございますもの、お隠しあそばさしたろうと安心をしております」

「それはね、私が読んでいた時にはいつていらつしやつたものだから、どこへしまうこともできずに下へはさんでおいたのをそのまま忘れたの」

こう伺つた小侍従は、この場合の気持ちはどう表現すればよいかも知らなかった。そこへ行つて見たが手紙のあるはずもない。

「たいへんでございますね。あちらも非常に恐れておいでになりました、毛筋ほどでも院のお耳にはいることがあつたら申し訳がないと言つておいでになりましたのに、すぐもうこんなことができたではございませんか。全体御幼稚で、男性に対して何の警戒もあそばさなかつたものですから、長い年月をかけた恋とは申しながら、こうまで進んだ關係になろうとはあちらも考えておいでにならなかつたことでございますよ。だれのためにもお氣の毒なことをなさいましたね」

と無遠慮に小侍従は言う。お若い御主人を気安く思つて礼儀なしになつてゐるのである。宮はお返辞もあそばさないで泣き入つておいでになつた。御気分がお悪いばかり

のようではなく、少しも物を召し上がらないのを見て、

「こんなにもお苦しそうでいらっしやるのに、それを捨ててお置きになって、もうすっかり快く^よなっておいになる奥様の御介抱を一所懸命になさらないとはね」

と乳母^{めのと}たちは恨めしがった。

院はお帰りになってから、まだ不審のお晴れにもならぬ今朝の手紙をよく調べて御覧になった。女房のうちであの中納言に似た字を書く女があるのではないかという疑いさえお持ちになったのであるが、言葉づかいは明らかに男性であつて、他の者の書くはずのないことが内容になつてもいた。昔からの恋がようやく遂げられたのではあるが、なお苦しい思いに悩み続けていることが、文学的に見ておもしろく書かれてあつて、同情は惹^ひくが、こんな関係で書きかわす手紙には人目に触れた時の用意がかねてなければならぬはずで、露骨に一目瞭然^{いちもくりょうぜん}に秘密を人が悟るようなことはすべきでないものと、院はお思ひになり、りっぱな男ではあるが、こうした関係の女への手紙の書き方を知らない、落ち散ることも思つて、昔の日の自分はこれに類する場合も文章は簡単に^{えほんのかみ}して書き紛らしたものであるが、そこまでの細心な注意はできないものらしいと、衛門督^{えもんのかみ}を輕蔑^{けいべつ}

あそばされるのであった。それにしても宮を今後どうお扱いすればよいであろうか、妊娠もそうした不純な恋の結果だったのである。情けないことである。人から言われたことでもなく、直接に証拠も見ながら、以前どおりにあの人を愛することは、自分のことながら不可能らしい。一時的の情人として初めから重くなどは思っていない相手さえ、ほかの愛人を持つていることを知つては不愉快でならぬものであるが、これはそうした相手でもない自分の妻である。無礼な男である。お上の後宮かみと恋の過失に陥る者は昔からあったが、それとこれとは問題が違う。宮仕えは男女とも一人の君主にお仕えするのであつて、同輩と見る心から友情が恋となつて不始末を起す結果も作られるのである。女御や更衣にようぎといつてもよい人格の人ばかりがいるわけではないから、浮き名を流す者はあつても、破綻はたんを見せない間は宮仕えを辞しもせずして、批難すべきことも起こつたであろうが、自分の宮に対する態度は第一の妻としてのみ待遇してきたではないか、心ではより多く愛する人をもさしおいて、最大級の愛撫あいぶを加えていた自分を裏切つておしまになるようなことと、そんなことは同日に論ずべきでない、これは罪深いことではないかと反感のお起こりになる院でおありになった。侍している君主のほうでもただ一通りの後宮の女性と御覧になるだけで、御愛情に接することもないような不幸な

人に、異性の持つ友情が恋愛にも進んでゆけば、あるまじいことは知りながらも、苦しむ男に一言の慰めくらいは書き送ることになり、相互の間に恋愛が成長してしまう結果を見るような間柄で犯す罪には十分同情してよい点もあるが、自分のことながらも、あの男くらいに比べて思い劣りされるほどの無価値な者でないと思うがと、院は宮を飽き足らずお思いになるのであったが、またこの問題はほかへ知らせてはならぬと思うことで御煩悶はんもんもされた。父帝もこんなふうに自分の犯した罪を知っておいでになって知らず顔をお作りになったのではなからうか、考えてみれば恐ろしい自分の過失であったと、御自身の過去が念頭に浮かんできた時、恋愛問題で人を批難することは自分にできないのであると思召おぼしめされた。

素知らぬふりはしておいでになるが、物思わしいふうは他からもうかがわれて、夫人は危い命を取りとめた自分をお憐あわれみになる心から、こちらへはお帰りになったものの、六条院の宮をお思いになると心苦しくてならぬ煩悶がお起こりになるのであろうと解釈していた。

「私はもう恢復かいふくしてしまったのでございますのに、宮様のお加減のお悪い時にお帰りになってお気の毒でございます」

「そう。少し悪い御様子だけれど、たいしたことでないのだから安心して帰って来たのですよ。宮中からはたびたび御使いみづかがあつたそうだ。今日もお手紙をいただいたとかいうことです。法皇の特別なお頼みを受けておられるので、お上かみもそんなにまで御関心をお持ちになるのですね。私が冷淡であればあちらへもこちらへも御心配をかけて済まない」

院が歎息たんそくをされると、

「宮中への御遠慮よりも、宮様御自身が恨めしくお思になるほうがあなたの御苦痛でしょう。宮様はそれほどなくてもおそばの者が必ずいろいろなことを言うでしょうから、私の立場が苦しゅうございます」

などと女王にょおうは言う。

「私の愛しているあなたにとって、あちらのことは迷惑千万に違いないが、それをあなたは許して、つまらない者の感情をまで思いやつてくれる寛大な愛に比べて、私のはただお上が悪くお思にならないかという点だけで苦勞をしているのは、あさはかな愛の持ち主というべきですね」

微笑をしてお言い紛らわしになる。

「六条院へはあなたが快くなつた時にいつしよに帰ればいいのですよ。宮の御訪問をするのもそれからあとのことです」

そうきめておいでになるように仰せられた。

「私は静かな独棲ひとりずみというものもしてみとうございますから、あちらへおいでになつて、宮様のお心のお慰みになりますますまでずっといらつしやい」

夫人からこんな勧めを聞いておいでになるうちに日数がたつた。

院のおいでにならぬ間の長いことで今までは院をお恨みにもなつた宮でおありになるが、今はその一部を自身の罪がしからしめているのであるということをお知りになつて、しまいに法皇のお耳へもはいつたならどう思召おぼしめすことであろうと、生きておいでになることすらも恐ろしくばかりお思われになるのであつた。お逢あいしたいときりに衛門督えんのかみは言ってくるが、小侍従は面倒な事件になりそうなのを恐れて、こんなことがあつたと緑の手紙のことを書いてやつた。衛門督は驚いて、いつの間にそうしたことができたのであらう、月日の重なるうちにはいろいろな秘密が外へ洩もれるかもしれぬと思うだけでも恐ろしくて、罪を見る目が空にできた気がしていたのに、ましてそれほど確かな証拠が院のお手にはいったということは何たる不幸であらうと恥ずかしくもつたいなく

すまない気がして、朝涼も夕涼もまだ少ないこのごろながらも身に冷たさのしみ渡るもののある気がして、たとえようもない悲しみを感じた。長い歳月としつきの間、まじめな御用の時も、遊びの催しにもお身近の者として離れず侍してきて、だれよりも多く愛顧を賜わった院の、なつかしいお優しさを思うと、無礼な者としてお憎しみを受けることになつては、自分は御前で顔の向けようもない。そうかといって、すっかりお出入りをせぬことになれば人が怪しむことであろうし、院をばさらに御不快にすることになろうと煩悶はんもんする衛門督は、健康もそこねてしまい、御所へ出仕もしなかった。大罪の犯人とされるわけではないが、もう自分の一生はこれでだめであるという気のすることによって、このことを予想しないわけでもなかったではないかと、あやまった大道に踏み入った最初の自分が恨めしくてならなかった。だいたい御身分相当な奥深い感じなどの見いだせなかった最初の御簾みすの隙間すきまも、しかるべきことではない。大将も軽々しいと思つたことはあの時の表情にも見えたなどと、こんなことも今さら思い合わせたりした。しいてその人から離れたいと願う心から欠点を捜すのかもしれない。どんなに貴人といつても、おおようで、気持ちの柔らかい一方な人は世間のこともわからず、侍女というものに警戒をしなければならぬこともお知りにならないで、取り返しのつかぬあやまちを御自身

のためにも作り、人にも罪を犯させる結果になったと思い、衛門督の心は、宮のお気の毒なことを思いやって堪えがたい苦悶くもんをするのであった。

宮が可憐かれんな姿で悪阻つわりに悩んでおいでになるのが院のお目に浮かんで、心苦しく哀れに
お思われになった。良人おっととしての愛は消えたように思っておいでも、恨めしい
のと並行して恋しさもおさえがたくおなりになり、六条院へおいでになった。お顔を御
覧になると胸苦しくばかりおなりになる院でおなりになった。祈祷きとうを寺々へ命じてさせ
てもおいでになるのである。表面のお扱いでは以前と何も変わっていない。かえって御
優遇をあそばされるようにも見えるのであるが、夫婦としてお親しみになることはそれ
以来断えてしまった。人目を紛らすために御同室やすにお寝みになりながら、院がお一人で
煩悶はんもんをしておいでになるのを御覧になる宮のお心は苦しかった。秘密を知ったともお言
いにならぬ院でおありになったが、女宮は御自身で罪人らしく萎縮いしゆくしておいでになるの
も幼稚な御態度である。こんなふうの人であるから不祥事も起こったのであろう。貴女
らしいとはいってもあまりに柔らかな性質は頼もしくないものであるとお考えになる
と、いろいろの人の上がお気がかりになった。女御にょぎがあまりに柔軟な様子であること
は、この宮における衛門督のような恋をする男があるとすれば、その目に触れた以上精

神を取り乱して大過失を引き起こすに至るかもしれぬ、女性のこうした柔らかない一方である人は、輕侮してよいという心を異性に呼ぶのか、刹那的せつなに不良な行為をさせてしまうものであると、院はこんなこともお思いになった。右大臣夫人がそれという世話を受ける人もなくて、幼年時代から苦勞をしながら才も見識もあつて、自分なども義父らしくはしながらも、恋人に擬しておさえがたい情念を内に包んでいたのを、かどだたず気がつかぬふうに退け続けて、右大臣が輕佻けいちような女房の手引きでしいて結婚を遂げた時にも、自身は單なる受難者であることを、それ以後の態度で明らかにして、親や身内の意志で成立した夫婦の形を作らせたことなどは、今思つてみてもきわめてりっぱなことであつたと、玉鬘たまかむらのこともこのふがない人に比べてお思われになった。深い宿縁があつて夫婦になった人であるから、離婚をしようとは考えないが、品行問題で世評の立つことになれば、それにしたがつて知らず知らず多少の侮蔑ぶべつを自分は加えることになるであらう。あまりにも実質に伴わない尊敬をしてきたと、以前からのことを思つてもごらんになった。

院は二条の朧月夜おぼろつきよの尚侍になお心を惹ひかれておいでになるのであつたが、女三によさんの宮みやの事件によつて、後ろ暗い行動はすべきでないという教訓を得たようにお思いになつて、

その人の弱さにさえ反感に似たようなものをお覚えになった。尚侍が以前から希望していたとおりに尼になったことをお聞きになった時には、さすがに残念な気がされてすぐに手紙をお書きになった。その場合に臨んで、されてよい予報のなかったことをお恨みになる言葉がつづられてあった。

あまの世をよそに聞かめや須磨すまの浦に藻塩もしほた垂れしもたれならなくに

人世の無常さを味わい尽くしながらも、今日まで出家を実行しえない私を、あなたはどんなに冷淡になつておいでになつてもさすがに回向えこうの人数の中にはお入れくださるであらうと、頼みにされるところもあります。

などという長いお文ふみであつた。早くからの志であつたが、六条院がお引きとめになるために、それでない表面の理由は別として、尚侍は尼になるのを躊躇ちゅうちよするところがあつたのでさえあるから、このお手紙を見て青春時代から今日までの二人のつながりの深さも今さらに思われて身にしむ尚侍であつた。返事はもう今後書きかわすことのない終わりのものとして心をこめて書いた尚侍の手跡が美しかった。

無常は私だけが体験から知ったものと思っておりましたが、しおくれたと仰せになります。まずことで、こんなにも思われます。

あま船にいかかは思ひおくれけん明石^{あかし}の浦にいさりせし君

回向^{えこう}には、この世のすぐれた方として決してあなた様を洩^もらしはいたしません。

これが内容である。濃い鈍色^{にび}の紙に書かれて、櫛^{しきみ}の枝につけてあるのは、そうした人のだれもすることであっても、達筆で書かれた字に今も十分のおもしろみがあった。この日は二条の院においでになったので、夫人にも、もう実際の恋愛などは遠く終わった相手のことであつたから、院はお見せになった。

「こんなふうに侮辱されたのが残念だ。どんな目にあつても平気なように思われて恥ずかしい。恋愛的な交際ではなしに、友人として同程度の趣味を解する人で、仲よくできる異性はこの人と齋院だけが私に残されていたのだが、今はもう尼になつてしまわれた。ことに齋院などは尼僧の勤めをする一方の人になつておしまいになった。多くの女性を見てきているが、高い見識をお持ちになつて、しかもなつかしい匂^{にお}いの備わつてい

るような点であの方に及ぶ人はなかった。女を教育するのはむずかしいものですよ。夫婦になる宿命というものは、目に見えないもので、親の力でどうしようもないものだから、結婚するまでの女の子の教育に親は十分力を尽くすべきだと思う。私は娘を一人しか持たなくてその責任の少ないのがうれしい。まだ若くて人生のよくわからなかったころは、子の少ないことが寂しく思われもしたのですがね。まあ孫の内親王をよくお育てしておあげなさい。女御はまだ大人になりきらないで宮廷へはいつてしまったのだから、すべてがいまだに不完全なものだろうと思われる。姫宮の教育は最高の女性を作り上げる覚悟で、微瑕びかもない方にして、一生を御独身で暮らしになってもあぶなげのないう素養をつけたいものですね。結婚をすることになっている普通の家の娘はまた良人おっとさえりっぱであれば、それに助けられてゆくこともできますがね」

などと院がお言いになると、

「りっぱなお世話はできませんでも、生きています間は姫宮のおためになりたい心でございますが、健康がこんなのではね」

と答えて夫人は心細いふうになが身を思い、自由に信仰生活へはいることのできた人々をうらやましく思った。

「尚侍の所は尼装束などもまだよくととのつていないことだろうから、早く私から贈りたいと思うが、袈裟けさなどというものはどんなふうにしてこしらえるものだろう。あなたがだれかに命じて縫わせてください。一そろいは六条の東の人にしてもらいましょう。あまりに法服らしくなつては見た感じもいやだろうから、その点を考慮して作るのですね」

と院はお言いになつた。青鈍色あおにびの一そろいを夫人は新尼君のために手もとで作らせた。院は御所付きの工匠をお呼び寄せになつて、尼用の手道具の製作を命じたりしておいでになつた。座蒲団ざぶとん、上敷うわしき、屏風びやうぶ、几帳きちようなどのこともすぐれた品々の用意をさせておいでになつた。

紫夫人の大病のために法皇の賀宴も延びて秋ということになつていたが、八月は左大將きづきの忌月きづきで音楽のほうをこの人が受け持つのに不便だと思われたし、九月はまた院の太后のお崩れかになつた月で、それもだめ、十月にはと六条院は思つておいでになつたが、女三にょさんの宮みやの御健康がすぐれないためにまた延びた。衛門督えもんのかみの夫人になつておいでになる宮はその月に参入された。舅しゅうとの太政大臣が力を入れて豪奢ごうしゃな賀宴がささげられたのである。病気で引きこもつていた衛門督もその時はじめて外出をしたのであった。しかもそ

のあとはまた以前にかえつて、病床に親しむ督であつた。女三の宮も御煩悶はんもんばかりをあそばされるせい、月が重なるにつれてますますお身体からだが苦しいふうに見えた。院は恨めしいお気持ちはあつても、可憐かれんな姿をして病んでおいでになる宮を御覧になつては、どうなるのであらうと不安を覚えてお歎なげきになることが多かつた。祈禱きとうをおさせになることで御多忙でもあつた。法皇も宮の御妊娠のことをお聞きになつて、かわいく想像をあそばされ、逢あいたく思召おもほしめされた。長く六条院は二条の院のほうに別れておいでになつて、お訪ねたずになることもまれまれであると申し上げた人も以前あつたことによつて、御妊娠がただ事の結果でなくはないのであるまいかとふとこんなことを思召すとお胸が鳴るのもあつた。人生のことが今さら皆お恨めしくて、紫夫人の病気のころは院があちらにばかり行つておいでになつたのを、もつともなこととはいへ、思いやりのないこととして聞いておいでになつたが、夫人の病後も院の御訪問はまれになつたというのは、その間に不祥なことが起こつたのではあるまいか。宮が自発的に墮落の傾向をおとりになつたのではなく、軽薄な女房の仕業しわざなどで不快な事件があつたのではなからうか、宮廷における男女の間は清潔な交際で終始しなければならぬものであるのに、その中にさえ醜聞を作る者があるのであるからと、こんなことまでも御想像あそばされる

のは、いっさいをお捨てになった御心境にもなお御子をお思いになる愛情だけは影を残しているからである。法皇が愛のこもったお手紙を宮へお書きになったのを、六条院も来ておいでになる時で拝見されたのであった。

用事もないものですから無沙汰ぶさたをしているうちに月日がたつということもこの世の悲しみです。あなたが普通でない身体からだになって健康もそこねているということをくわしく聞きました、今はどうですか。世の中が寂しくなるような運命に出あっても、忍んでお暮らしなさい。恨めしがる様子をお見せになったり、妬みねたを告げたりすることは上品なものではありません。

などと訓さとしておありになるのである。院はお氣の毒で、心苦しくて、宮に秘密のあることなどはお知りあそばされずに、自分の不誠意とばかり解釈しておいでになるのである。うとうと思いいになって、

「お返事はどうお書きになりますか。心苦しいお手紙で私はつらい気がしますよ。あなたにどんなことがあっても、人に変わった様子は見せまいと私は努めているのですよ。だれがいろいろなことを申し上げたのだろう」

とお言いになると、恥じて顔をおそむけになる宮のお姿が可憐かれんであった。顔がすつか

り瘦せて物思いに疲れておいでになるのが上品に美しい。

「あなたの幼稚な性質を知っておいでになって、こんなにもお言いになるのだと、私は他のことと思ひ合わせてごもつともだと思われる点がありますよ。それで今後も危あぶなかく思われてならない。こんなふうに言つてしまおうとは思ひなかつたことですが、院が私を頼みがいなく思召すだろうと思うことが苦痛ですからね。あなただけにでも私が軽薄な者でないことを認めてほしいと思うのですよ。深く物をお考えにならないで、人のいいかげんな言葉にお動きになるあなたには、私のほんとうの愛が浅いものに見えもするでしょうし、またあなたとは年齢としの差のはなはだしい良人おっとを軽蔑けいべつしたくもなるでしょうけれど、私としてそれを残念に思わないわけはありませんが、院の御在世中だけは、これを幸福な道としてお選びになつたことですから、老いた良人をもあまり無視するようなことはお慎みになるがいいのですよ。昔から願つてゐる出家の志望も、自分よりは幼稚な宗教心しか持つまいと思つていた女の人たちが先に実行するのを傍観しているのも、私自身がこの世の欲を捨てえないのではなくて、出家をあそばす際にはあなたをお託しになつた院のお志に感激した心が、すぐまた続いてあなたを捨てて行くような行動を取らせなかつたのですよ。以前は気がかりに思われた人も今ではもう出家の絆ほどしに

ならないだけになっているのです。女御だつてどうなるか知りませんが、皇子たちがお殖えにもなつてゆくのですから、後宮の地位などは問題にさえせねば苦勞のない立場を得られることだけはできると私も見ておけます。そのほかの人たちは成り行きのままで、私といつしよに出家をしてしまつてももういいほどの年齢としになっているとこのごろでは思われます。院ももう長くはおいでにならないでしょう。以前よりいつそうお身体からだが弱くおなりになつて、心細い御様子でいらつしやるとのことですから、今になつて悪い名などをお耳に入れて御心配をかけてはいけませんよ。この世は何でもありませんが、来世のお妨げになることをしてはあなたの罪も大きくなりますよ」

そのことと露骨に言いにならないのであるが、しみじみとお説きになるために、宮は涙ばかりがこぼれて、知らず知らずめいり込んでおしまいになつたのを御覧になる院も、お泣きになつて、

「他の人がこうしたことを言うのを、聞く必要もない老人としよりの理窟りくつだと思つた私だが、いつのまにかそれを言うほうの人に私になつている。よけいなことを言う老人だと思ひになつていつそいいやになるでしょう」

ともお言いになつて、硯すずりを引き寄せて御自身で墨をおすりになり、紙をお選りよになり

などして、お返事を書かせようとするのであるが、宮は手も慄ふるえてお書きになれない。あの濃厚な言葉の盛られてあつた衛門督えもんのかみの手紙の返事はこんなに洩はらずに書かれたであろうとお思になると、また反感が起おこるのでもおありになったが、それでも院は言葉などを口授くじゅしてお書かせになった。

「お伺いになることはこんなことで今月もだめでしたね。それに新婚者の女に二よにの宮みやが派手でな御賀をおさげになった時に、老人の妻であるあなたが競争的に出て行くのは遠慮すべきだと思いましたよ。十一月はあなたのお母様の忌月でしょう。十二月はあまりに押しつまってよろしくないし、あなたの身体からだも見苦しくなるだろうから、久しぶりにお姿を御覧に入れるのはいかかと思いますが、しかしそうそう延ばしてよいことでありませんからね、あまり物思いをしないようにして、朗らかな心になって、瘦やせたお顔のなおるようになさなさい」

などとお言いになって、さすがにかわいくは思召すのであつた。

衛門督をどんな催し事にも必要な人物としてお招きになって御相談相手に今まではあそばす院でおありになったが、今度の法皇の賀に限って何の仰せもない。人が不審がるであろうとは思いいなるのであるが、その人が来てはずかしめられた老人である自分

の见られることも不快であるし、自分が彼を見ては平静で心がありえなくなるかもしれないと院はお思いになつて、もう幾月も参殿しない人を、なぜかとお尋ねになることもないのである。ただの人たちは衛門督が病氣続きであつたし、六条院にもまた音楽その他のお催しの全くない年であるからと解釈していたが、左大将だけは何か理由のあることに違いない、多感多情な男であるから、自分が推測していたあの恋で自制の力を失うようなことがあつたのではないかとは見ていても、まだこれほど不祥なことが暴露してしまつたとは想像しなかつた。

十二月になつた。十幾日と法皇の御賀の日が定められて六条院の中は用意に忙しくなつた。二条の院の夫人はまだそのまま帰らずにいたが、御賀の試楽があるのに興味を覚えてもどつてきた。女御によこも実家にいた。今度のお産でお生まれになつたのもまた男宮であつた。次々に皆かわいひ宮様を夫人はお世話することに生きがいを感じていた。試楽の日は右大臣夫人も六条院へ来た。左大将は東北の御殿でそれ以前にすでに毎日監督する舞曲の練習をさせていたから、花散里夫人は試楽の見物には出て来なかつた。衛門督えもんのかみをこの試楽の日に除外するのは惜しく物足らぬことであると院はお思いになつたし、それ以上にまた人の不審を引くことをお恐れにもなつて、来るようにと使いをお向けに

なつたが、病の重いことを申して督は出て来ようとしなかつた。病氣といつても何という名のある病をしているのでもないわけであるが、やましく思う点があるのであらうと、心苦しく思召して、特使をさえもおやりになつて招こうとあそばされた。父の大臣も、

「なぜ御辞退をしたかね。何か含むことでもあるように院が思いになるだろうに。大病というのではないのだから、無理をしても参つたほうがよい」

と勧めていたところへ再度のお使いが来たのであつたから、つらい気持ちをいだきながら参つた。それはまだ他の高官などの集まつて来ない時分であつた。これまでのようにお座敷の御簾みすの中へ衛門督をお入れになつて、院御自身はまた一つの御簾を隔てた奥のお居間うわだにおいでになつた。噂うわさのとおりに非常に痩せて顔色が悪かつた。平生ふうせいもはなやかな派手はでな美しさは弟たちのほうに多くて、この人は深く落ち着いた静かな風采ふうさいによさのあつた人であるが、今日はことにおとなしい身のとりなしで侍している姿を、内親王の配偶者として見ても相応らしい男であるが、その関係の正しくないのが不快だ、憎悪どうおを覚えずにはおられないのであると院は思召したが、さりげなくしておいでになつた。

「機会あがなくてあなたにも長く逢あいませんでしたね。長く病人の介抱をしていて何の余

裕もなくてね、前からここへ来ておいでになる宮が、院の賀に法事をして差し上げたいと言っておられたのが、いろいろな故障で滞っていてね、今年も暮れになったので、これ以上延ばすこともできず、以前に計画したとおりのことはとのわないが、形だけでも精進のお祝い膳ぜんを差し上げる運びになって、賀宴などというたいそうだが、親戚しんせきの子供たちの数がたくさんにもなっているのだから、それだけでも御覧に入れようと思つて舞の稽古けいこなどをさせ始めたものだから、せめてそれだけでもうまくゆくようにと思つて、拍子が合うか試してみるのですが、指導をしていたくのに、だれがよいかもよく考える間がなくてあなたに御面倒を見てもらうのがよいときめて、長くおいでもなかつたお恨みも捨てたわけですよ」

とお言いになる院の御様子に、昔と変わった所もないのであるが、衛門督は羞恥しゅうちを感じて自身ながらも顔色が変わっている気がして、急にお返辞ができないのであつた。「長らく奥様がたが御病氣をしておいでになりますことを承っておりまして、御心配を申し上げながら、前からございました脚氣かっけがしきりに出てまいりまして、歩行が困難でございましたために御所へ上がることができませんで、すっかり世の中から隔離されましたような寂しい生活をいたしておりました。院がおめでたい年に達せられますので、

年来の御交誼こうぎに対してまずお祝いを申し上げなければと父が申しおりましたが、関白を拝辞しました自分が表だって出ることよりも、地位は低くとも中納言の私が主催するのが妥当であると父は考えるようになりまして、私の誠意をお目にかくべきだと勧められましたものですから、病体をおしてあちらへはお伺いいたしたのでございます。いよいよお寂しい静かな御生活のように拝見いたしましたあちらの御様子では、はなやかな賀宴をお持ち込みあそばすようなことは恐縮なされるだけではないかと拝察されまして、こちら様の御質素な御計画はかえって御満足になることかと存ぜられます」

と衛門督えもんのかみが申すと、華奢かしやを尽くしてお目にかけてという前日の賀宴を女二の宮の関係でしたとは言わずに、父のためにしたと話すのに心の鍛錬のできていることがうかがわれると院は思召された。

「私の所でやらせていただくことはこのとおりに簡単なことであるのを見て、一概に悪く言う人もあるであろうと思つていたが、理解のあるお言葉を聞いて、さすがにとあなたにはいいよ敬意が払われる。大將は役人としては少しは経験ができたようでも、そうした繊細な観察をすることなどは、得意でもないだろうがいつこうだめですよ。法皇はあらゆる芸術に通じておいでになるが、その中でも最も音楽の御造詣ぞうけいが深いから、そ

れらに遠ざかっておいでになる御出家後といえども院が御覧になるのだと思うと晴れがましいですよ。あの大將といっしょに、舞い手になる子供へ、心得べきことをよく注意しておいてくれたまえ。専門家の師匠というものは自身の芸には偉くても融通のきかないものだから」

などとお命じになるなつかしい味のある院の御様子をうれしく拝しながらもまた衛門督は恥ずかしく、きまり悪く思われて、言葉少なにしていって少しも早く御前を立つて行きたいと願われる心から、以前のように細かい話しぶりは見せずにいるうち、ようやく願いどおりにここを去るによい時を見つけた。東北の御殿で大將が掛りかかになつて十分に用意してあつた舞い手と楽人の衣装などが、また衛門督の意見によつて加えられるものもできた、その道には深く通じている衛門督であつたから。今日は試楽の日なのであるが、これだけを見物するのにとどまる夫人たちも多いため、目美しくして見せるのに、賀の当日の舞い人の衣装は、明るい白橡しろつるばみに紅紫しらがさねの下襲しつがさねを着るはずであつたが、今日は青い色を上えんじに臙脂えんじを重ねさせた。今日の楽人三十人は白襲しろがさねであつた。南東の釣殿つりどのへ続いた廊へやの室を奏楽室にして、山の南のほうから舞い人が前庭へ現われて来る間は「仙遊霞せんゆうか」という楽が奏されていた。ちらちらと雪が降つて、もう隣へ近づいた春を見せて梅の微ほほ

笑む枝が見える林泉の趣は感じのよいものであった。

縁側に近い御簾みすの中に院のお席があつて、そこにはただ式部卿しきぶきやうの宮が御同席され、右大臣の陪覽する座があつただけである。以下の高官たちは皆縁側に席をして、そこには形式を省いた饗応きやうおうの物が出されてあつた。右大臣の四男と、左大将の三男、それに兵部卿ひやうぶきの宮の御幼年の王子お二人の四人立ちで万歳樂が舞われるのであるが、皆小さい姿でかわいかった。四人とも皆高い貴族の子供たちで風貌ふうぼうが凡庸でない。皆にいたわれながら小公子たちは登場した。また大将の典侍腹てんじばらの二男と、式部卿の宮の御長男でもとは兵衛督であつて今は源中納言となつている人の子のこの二人が「皇※」かうじやう、右大臣の三男が「陵王」りやうわう、大将の長男の「落蹲」らくそんのほかにも「太平樂」「喜春樂」などの舞曲も若い公達だちが演じた。日が暮れてしまうと御前の御簾は巻き上げられて、音楽にも舞にもおもしろみが加わつてゆく。かわいい姿の御孫の公達は秘伝を惜しまずそれぞれの師匠が教えた芸に、よい遺伝からの才氣の加味された舞をだれもおもしろく見せるのを、皆かわいく院は思召おもほしめした。老いた高官たちは皆落涙をしていた。式部卿の宮も御孫の芸にお鼻の色も変わるほど感動されたのであつた。六条院が、

「年のゆくにしたがつて酔い泣きをするのがますます烈はげしくなつてゆく。衛門督えもんのかみのお

かしそうに笑っておられるのが恥ずかしい。歲月はさかさまに進むものではないからね。あなたがたでも老いのがれられないのですよ」

と言つてその人の顔を御覧になる。だれよりもまじめに堅くなつていて、偽りでなく身体からだの具合も悪く思われ、おもしろいことも目にとまらぬ気持ちになつてゐる衛門督を、お名ざしになり、酔態に託してこう仰せられるのは戯れらしくはあつたが、その人ははつと胸がとどろいて、めぐつて来た杯は手に取つてもただ少ししか飲まないのを、院は見とがめになつて、御座からたびたび侍者に酒を持たせておつかわしになり、おしいになるのを、困りながら辞退する取りなしなども、平凡な人とは見えず感じよく院はお思ひになつた。身心の苦痛に堪えられなくなつて衛門督はまだ宴の終わらぬうちに辞して歸つたが、悪酔いからさめることのできないのは、院を目まのあたり見て罪の自責に苦しんだために逆上したのであるうが、それほど臆病おくびょうな自分ではなかつたはずであるがと悲しんだ。一時的な酒精の毒ではなくてそのまま衛門督は寝ついて重い容体になつた。衛門督の父母がよそに置いてあるのが不安になり、自邸へつれもどすことにしたのを、夫人の宮の悲しがつておいでになるのがまた衛門督には苦しく思われた。何事もなかつた間は、衛門督自身も、宮をお愛する情熱のありなしすら忘れてゐるほどの良人

であつたが、もうこの世での別れかもしれぬと予感される今日の心には、宮をお残しして行くことが悲しくて、未亡人の寂しい人におさせするのが堪えられない苦痛に思われ、またもつたいたなくも思われ歎かれるのであつた。宮の御母の御息所みやすどころも非常に悲しんだ。

「世間の慣ないでは親は親として、御夫婦というものはどんな時にもごいっしょにおいになることになっていきます。あちらへ移つておしまいになつて、御回復なさるまで別々においでになるのは、宮様のためにおかわいそうなことですから、せめてもうしばらくの間こちらで養生をなさいます」

この人が病床との隔てに几帳きちようだけを置いて看護をしているのである。

「ごもつともです。私ごとき者と結婚をしてくださいました宮様のためには、せめて私が長生きをして相当な地位を得るように努力せねばならぬと心がけてはいたのですが、こんな病人になつてしまいましたは、私の愛がどれほどのものであつたかを宮様にわかつていただけないで終わるかと思ひますことで、もう命の助からぬような気のしますうちでも、死なれぬ氣がするのです」

などと泣き合つていて、迎えようとするのに、すぐに移つても来ないのを母の夫人は

気づかわしがって、

「そんな場合に、どうして親の所へ来ようとあなたは思ってくれないのだろう。私が病気をする時には、おおぜいの子供の中でも特にあなたがそばにいてほしく、またいてくれれば頼もしくてうれしいのだのに、いつまでもなぜそちらにあなたはいる」

こんなことを使いに言わせて来るのにももつともなところがあつて、衛門督えもんのかみは母へ同情をせずにはおられないのであつた。

「私がいちばん初めに生まれたためなのでしょうが、大事にされていまして、こんなになつてもまだ母はかわいがりまして、しばらくの間でも逢あわずにいることを苦しがるのですから、もう頼み少ない病状になつている際に、母の逢いたがる心を満足させないのは未来の世までの罪になるだろうと思われますから、とにかく病床をあちらへ移します。もういよいよ危篤になつたというしらせがありましたら、そつと大臣邸へおいでなさい。必ずもう一度お目にかかりましょう。ぼんやりとした性質なものですから、気もつかずにあなたを不愉快におさせしたような場合もあつたであらうと思われますのが残念でなりません。こんなに短命で終わろうとは思いませんで、長い将来に誠意をくんでいただける日が必ずあるもののように思つて安心していました」

と、衛門督は宮に申して、泣く泣く父の家へ移って行つた。宮はあとに思いこがれておいでになつた。大臣家では病人の扱いに大騒ぎをして、祈祷きとうやその他に全力を尽くすのであつた。病は最悪という容態でもない。ただ食欲しよくよくがひどく減退して、もうこちらへ来てからは果物くだものをさえ取ろうとしなかつた。教養の足りた優秀な高官と見られている人が、こんなふうに頼み少ない容体になつていることを世間は惜しんで、見舞いを申し入れに來ぬ人もない。宮中からも法皇の御所からもしばしばお見舞いの御使みつかいが來て、衛門督の病状を御心痛あそばされているのを見ても、両親は悲しくばかり思われた。六条院も非常に残念おぼしめに思召して、たびたび懇切なお見舞いの手紙を大臣へ下された。左大將はまして仲のよい友人であつたから、病床へもよく訪ねたずて來て、衛門督をいたましがつていた。

法皇の御賀は二十五日になつた。現在での花形の高官が重い病氣をしてその一家一族の人たちが愁うれいに沈んでいる時に決行されるのは寂しいことのように院はお思ひになつたが、月々に支障があつて延びてきたことであつたし、ぜひ今年じゅうにせねばならぬことでもあつたから、やむをえぬことだったのである。院は姫宮の心情を哀れに思ひになつてゐた。かねての計画のように五十か寺での御誦經ずきようが最初にあつて、法皇のおい

であそばれる寺でも大日如来だいにちによらいの御祈りが行なわれた。

「一冊堂・青空文庫」について

「一冊堂・青空文庫」は、青空文庫を紙の書籍で読むことができるよう、公開されているデータを pdf 形式に変換して、無料で配信させていただいております。変換に際して、旧仮名使い、ルビ等がうまく変換されない場合があります。できるだけ修正するようにしておりますが、お気付きの場合、ご連絡いただければ、早急に修正データをアップロードいたします。ご協力いただきますようお願い申し上げます。

青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp>) は、著作権の消滅した作品や「自由に読んでもらってかまわない」とされたものを、テキストと XHTML（一部は HTML）形式で公開しているインターネット電子図書館です。青空文庫は、そのサイト運営も含め、電子データの作成や校正作業などはボランティアの皆さんの活動によって支えられています。



一冊堂・青空文庫 pdf データ

2016 年 3 月 15 日 第一期製作

原 稿 青空文庫

発行者 佐藤 聖

発行所 一冊堂

〒165-0025
東京都中野区沼袋 2-32-5 幸荘 C 室
mail : issatudo@gmail.com
